

市 原 市 ^あ ^ず ^こ ^{ふん} ^{ぐん} 安 須 古 墳 群

1 9 9 3

泉 水 建 材 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県中央部に位置し、「王賜」銘鉄剣、あるいは上総国分寺・尼寺跡に代表される埋蔵文化財の宝庫として知られる市原市は、豊かな自然環境を背景に縄文時代のいにしえより永く人々に愛され続け現代に至った地であります。

このような我々祖先の残した貴重な文化遺産を保護・活用し、後世に継承していくことは我々市民に課せられた大きな課題でもあり、切望するところでもあります。しかし一方では首都圏に位置することから、東京のベッドタウンとしての宅地造成・道路整備事業・教育施設の建設などの一連の地域開発事業は、現代に生きる我々市民にとって、よりよい生活環境を提供してくれる喜ばしいものではありますが、その反面、地域開発事業が進めば進むほど、貴重な文化遺産の破壊につながることもしばしばあり、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が強く求められています。

当センターでは、地域開発に伴う埋蔵文化財の調査成果を、遺跡発表会・遺跡見学会などの開催や、「私たちの文化財」の発行などを通して広く市民の皆様へ還元するよう努め、また今後ともいっそうの御理解をいただけるよう努力邁進いたすつもりであります。

今回ここに報告する「安須古墳群」は、ゴルフ練習場進入道路建設工事に先立ち、工事と埋蔵文化財保護との調整に基づき、関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施した遺跡であります。

本報告書は、この調査成果をまとめたものであり、学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く市民の皆様にも活用していただけるならば幸いです。

本報告書の刊行にあたり、御指導・御協力をいただきました千葉県教育庁文化課、ならびに泉水建材株式会社の方々に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 植 草 久 善

例 言

1. 本書は千葉県市原市安須字金掘他に所在する安須古墳群（1・2号墳）の調査報告書である。
2. 調査はゴルフ練習場進入道路建設工事に伴い実施したものである。
3. 発掘調査・整理作業は以下のとおり行なった。
発掘調査 平成4年4月15日～平成4年7月15日 担当 木對和紀
整理作業 平成4年10月16日～平成4年11月30日 担当 木對和紀
4. 本書の原稿執筆は木對和紀が行なった。また鉄器実測に関しては、大村 直氏の協力を得た。
5. 本書に使用した方位は、座標北である。
6. 本書に使用した国土地理院発行の地図は、1：50,000千葉・姉崎である。
7. 発掘調査から整理作業の課程で、泉水建材株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会社会教育部文化課の諸機関から御指導・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

目 次

本文目次

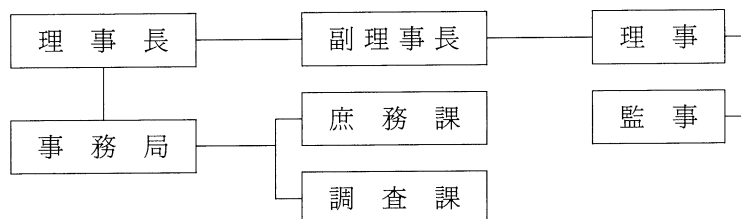
序 文	
例 言	
財団法人 市原市文化財センター組織表	
第Ⅰ章 序 説	1
Ⅰ 調査に至る経緯と経過	1
Ⅱ 遺跡の位置と歴史的環境	1
第Ⅱ章 遺構と遺物	10
1 古 墳	10
1号遺構	10
2号遺構	17
3号遺構	22
2 道 跡	24
4号遺構	24
3 住居跡	24
5号遺構	24
6号遺構	26
4 掘立柱建物跡	30
7号遺構	30
5 土 坑	30
8号遺構	30
第Ⅲ章 ま と め	31

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	
第2図 安須古墳群周辺地形図と主要古墳	
第3図 安須古墳群現況地形測量図	
第4図 遺構配置図	
第5図 安須1・2号墳実測図（平面図）	
第6図 安須1・2号墳実測図（断面図）	
第7図 2号・墳実測図（断面図）	
第8図 1号墳及び周辺出土遺物実測図	
第9図 2号墳埋葬施設実測図，1～2号墳間におけるローム堆積範囲及び断層実測図	
第10図 2号墳及び周辺出土遺物実測図	1
第11図 2号墳及び周辺出土遺物実測図	2
第12図 2号墳及び周辺出土遺物実測図	3
第13図 3号遺構周辺実測図	1
第14図 3号遺構周辺実測図	2
第15図 5号遺構実測図	
第16図 5号遺構出土遺物実測図	
第17図 6号遺構実測図	
第18図 7・8号遺構実測図	
第19図 7・8号遺構及び出土遺物実測図	

財団法人 市原市文化財センター組織表

平成 4 年度



役 員 …………… 総数12人（理事10人、監事 2 人）

職 員 …………… 総数14人（事務職員 4 人、技術職員10人）

役 員

理事長 星野一郎（市原市教育委員会教育長）～ 4. 10. 31
植草久善（市原市教育委員会教育長） 4. 11. 1 ～

副理事長 田中信夫（市原市教育委員会社会教育部長）

常務理事 鈴木太郎（市原市教育委員会副参事）

理 事 加藤晋平（千葉大学教授）

理 事 寺村光晴（和洋女子大学教授）

理 事 木村千春（郷土史家）

理 事 佐野年男（市原市企画部長）

理 事 落合 泰（市原市総務部長）

理 事 加藤睦郎（市原市財務部長）

理 事 田中俊夫（市原市都市計画部長）

監 事 高橋 孝（市原市会計課長）

監 事 青柳四郎治（市原市教育委員会総務課長）

職 員

庶務課			調査課		
課	長	田丸萬富	課	長	米田耕之助
主	事	大鐘光江	主任調査研究員		田中清美
主	事	阿部茂之	主任調査研究員		浅利幸一
			調査研究員		大村 直
			調査研究員		近藤 敏
			調査研究員		高橋康男
			調査研究員		木對和紀
			調査研究員		忍澤成視
			調査研究員		田中茂良
			調査研究員(嘱託)		半田堅三
			主	事	高浦貞子

第Ⅰ章 序 説

Ⅰ 調査に至る経緯と経過

ゴルフ練習場進入道路建設工事に伴い、泉水建材株式会社代表取締役泉水彪は、事業地域内における「埋蔵文化財の有無および取扱い」についての照会を市原市教育委員会教育長宛に提出し、これを受けた千葉県教育庁文化課及び市原市教育委員会文化課の三者によって協議が行われた結果、事業地域内に存在する古墳2基を主対象とする記録保存の方針が決定された。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センターへの委託事業として調査対象区1,092㎡に対して実施され、平成4年4月16日より開始し、同年7月末日をもって終了した。

Ⅱ 遺跡の位置と歴史的環境

安須古墳群の主要は養老川中流域、標高52m前後の舌状台地上に存在する。東に養老川を眼下とするこの台地縁辺部には、現状における肉眼観察においても明瞭にマウンドを保持する26基の古墳が顕著に認めることができる地域である。また明瞭なるマウンドを認めることができない台地西側の平坦面は、安須別府台遺跡として確認調査が実施されており、すでに墳丘を流失した終末期方墳ないしは奈良・平安時代の墳墓として捉えられる所謂方形周溝20基の他、円墳2基、下層には縄文～弥生時代の集落跡が形成されており、少なくとも当台地上に古墳時代以降を中心とする一大墳墓群が形成されている。

一方、安須古墳群の主要が存在する台地から西側に連なる瘦尾根を経て、尾根伝いに隣接する北側の台地上には、弥生から歴史時代の遺構を主体とする比較的遺構密度の高い釜神遺跡が存在している。

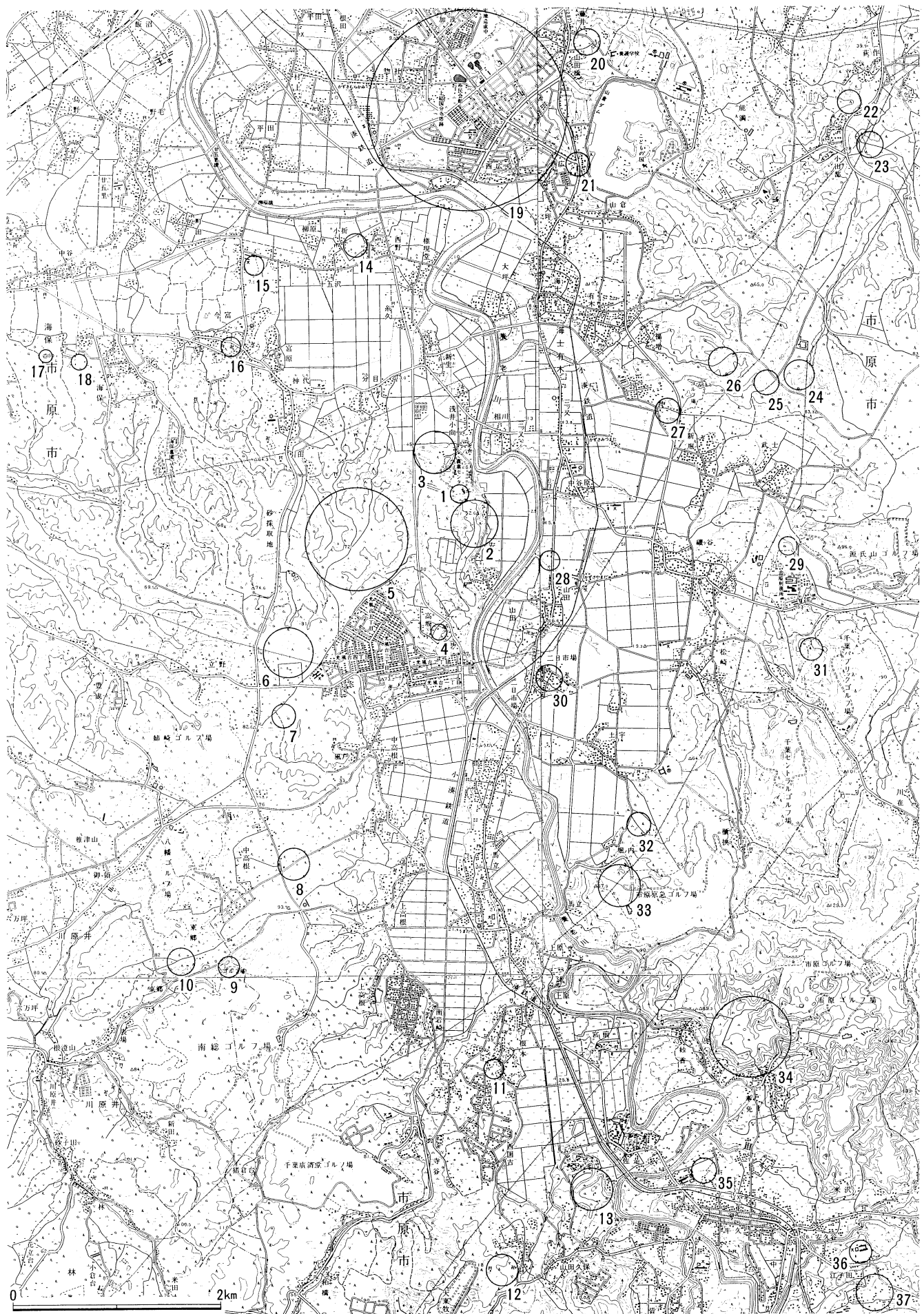
今回調査を実施した安須1・2号墳は、安須古墳群中でも大型古墳として捉えられる3・4号墳の西側からさらに一段下った標高40m前後の馬の背状の瘦尾根に位置し、ちょうど両遺跡の狭間に存在している。

ここではこれまでに調査が実施された養老川中流域に関わる遺跡の概略を述べ、周辺の歴史的環境について触れてみたい。

また、第1図に示した遺跡分布図におけるそれぞれの遺跡は、便宜上分水嶺及びその流域等を加味し概ね次の6地域に分ける。

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| A 養老川下流域左岸、通称国分寺台周辺地域 | (19～21) |
| B 村田川下流域及びこれに灌ぐ神崎川流域 | (22～23) |
| C 養老川下流域右岸地帯 | (14～18) |
| D 養老川中流域左岸地帯 | (24～33) |
| E 養老川中流域、牛久周辺地域 | (11～13及び34～37) |
| F 養老川中流域右岸地帯、及び小櫃川支流 | (1～10) 1が安須古墳群(1・2号墳) |
- (右岸・左岸は海上より河口方向を見た場合に統一した)

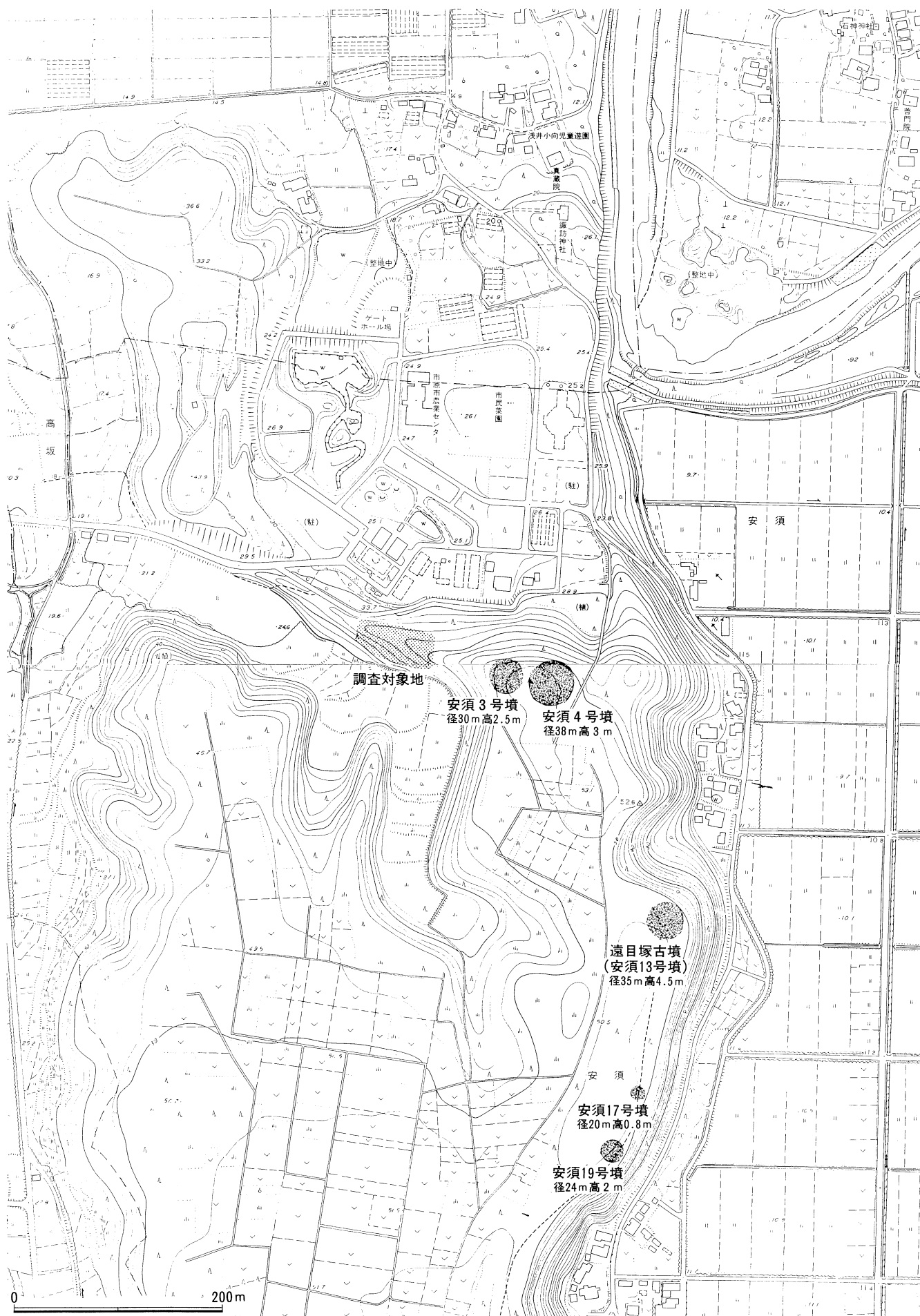
市原市には菊間古墳群・姉崎古墳群という大型前方後円墳が集中的に分布する古墳群が存在し、前



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺 跡 名	遺 跡 の 主 な 内 容	備 考
1	安須古墳群（1, 2号墳）	本報告書	隣接台地上の一部を、安須別府台遺跡として確認調査を実施
2	安須別府台	古墳群及び集落跡	平成3年度確認調査を実施
3	釜神	弥生中～古墳初頭を中心とする集落跡、及び墳墓群	平成4年度、確認本調査実施中
4	高坂棒ヶ谷	弥生後期住居跡11、木棺墓1、古墳1他	弥生後期木棺墓より、ガラス小玉検出
5	萩原野	終末期方墳群、古墳時代後～終末期集落跡他	平成元年度一歩本調査実施
6	山見塚	縄文後期集落跡、貝塚、終末期方墳～方形区画改葬墓群	確認調査後消滅
7	外迎山	終末期方墳2、方形区画改葬墓28、火葬墓4	周辺に鎌倉街道の字名あり
8	南名山	方形区画改葬墓3	方形区画改葬墓群の1基より、内部主体として蔵骨器を検出
9	萩ノ原廃寺	平安時代寺院跡、基壇2、掘立柱建物跡4他	瓦塔片、墨書土器「寺、仏、寺塔、提寺」他
10	川原ノ井廃寺	奈良・平安時代寺院跡、建物跡6、住居跡（奈良・平安）6、溝6	四面廂3×4間他。建物跡は掘立柱建物跡から礎石建物へと建替
11	南岩崎古墳群	主軸長50m前後と推定される6世紀代の前方後円墳、吉野1号墳他	昭和62年度、吉野1号墳周溝一部を調査、埴輪片等検出
12	西国古横穴墓群	横穴墓11基	昭和46年度調査
13	佐是古墳群	古墳、住居跡他	平成2年度一部調査
14	海上郡家	掘立柱建物跡8、井戸8、住居跡4、溝、土坑他	大字「小折」、郡衙関連区画溝検出
15	今富廃寺	白鳳・奈良時代寺院跡	大和、山田寺系の古瓦検出
16	今富塚山古墳	全長110m前後の前期前方後円墳、内部施設は木炭櫓か？	平成3年度一部調査、後円部の大半は削平されている。
17	海保大塚	径45～60m前後と推定、大型円墳改葬の塚か？	平成2年度測量調査のみ実施
18	海保古墳群	3号墳は全長40m前後の帆立貝式前方後円墳の可能性あり。	1968年度調査を実施
19	国分寺台遺跡群 神門古墳群 根田 稲荷台 諏訪台 上総国分僧寺 上総国分尼寺 他	出現期古墳（墳丘墓）3他 墳墓・集落跡（御林跡遺跡） 古墳12基、奈良・平安時代掘立柱建物跡群、古代道路跡他 墳墓、集落跡（天神台遺跡） 奈良時代以降官宮寺院跡、伽藍配置は大官大寺系 奈良時代以降官宮寺院跡、建物群は七堂伽藍 （長平台遺跡、南向原遺跡、蛇谷遺跡、東間部多古墳群etc）	（一部図中円内に所収しきれない遺跡が存在する） 下層に弥生時代後期住居跡 根田1号墳 墳丘下方方形周溝墓2基の内部主体より計10点の銅鈎、古墳主体部より素環頭大刀等検出 1号墳より「王賜」銘鉄剣検出 小銅鐸・盤龍鏡等検出 南北4.5町、東西最広部3町以上の寺地 南北3.5町、東西2.5町と60尺の寺地、付属雑舎の検出
20	山田橋表通	弥生～奈良・平安住居跡46、掘立柱建物跡3、土壇墓1、古代道路跡	古代道路跡は稲荷台遺跡へ続くものと推定される。隣接地に山田橋玄街道貝塚が存在
21	山倉古墳群	前方後円墳2、円墳3、方墳1	1号墳より横穴式石室、円筒83、人物11、鶏、家形埴輪等検出
22	小田部新地	方形周溝墓14、土壇墓7、円墳1、方墳1、方形区画改葬墓2、地下式改葬墓2、弥生～古墳住居後10、掘立柱建物跡1、近世火葬墓34他	土壇墓の1基より、須恵器甕、珠文鏡、ガラス小玉115点検出。方形周溝墓の内部主体の1つは土器棺
23	小田部向原	古墳（墳丘墓）1、住居跡（弥生後期～古墳時代後期）	古墳（墳丘墓）は1968年調査時の小田部古墳、住居跡は30軒確認うち17軒調査
24	武士	縄文後期集落跡、弥生中～後期住居跡63、再葬墓5、終末期古墳～方形区画改葬墓群	弥生一集落をほぼ完掘
25	武士廃寺	白鳳・奈良時代寺院跡	鉦齒文縁複弁蓮花文鏡瓦・深頸三重弧文字瓦の他、今富廃寺と同範関係の三重弧文鏡瓦検出
26	福増山ノ神	住居跡弥生4、古墳後期5、方形区画改葬墓2、地下式土壇墓及び改葬墓6他	方形区画改葬墓の内部主体の1つは、地下式改葬墓
27	新堀叶台	弥生中～古墳時代中後期住居跡69、掘立柱建物1他	遺構相互の重複が激しく、遺跡が存在する微高地約22,000㎡ほぼ全域に遺構群が存在するものと予測される。
28	山田大宮	弥生中～後期方形周溝墓8他	昭和60年度調査
29	北旭台	弥生後期～古墳前期住居跡16、方形周溝墓2、方墳2、円墳2他	古墳時代前期住居跡より有鈎銅鈎、中期方墳より鉄鉾検出
30	二日市場廃寺	白鳳・奈良時代寺院跡、掘立柱建物跡他	大和紀寺系古瓦検出
31	門脇	住居跡15、方形区画改葬墓4、掘立柱建物跡1	海郷に関連すると想定される「海□里長」の墨書土器検出
32	土宇下原	縄文～歴史時代集落跡、遺構相互の重複が激しい。	昭和60年度一歩本調査、平成3年度確認調査実施
33	土宇	弥生～古墳時代集落跡主体	検出住居跡128軒のうち85軒は弥生住居跡
34	上原台	縄文早期炉穴群、縄文前期集落跡、前方後円墳1、終末期方墳～方形区画改葬墓群他	凸面布目瓦、四葉弁弁蓮華文鏡瓦、三重弧文字瓦検出
35	牛久古墳群	（矢原Ⅰ・Ⅱ号墳）Ⅰ号墳は円墳？Ⅱ号墳は方形墳？	市原高校敷地内、Ⅰ号墳より銅鍬、槍先、Ⅱ号墳より銅鍬検出
36	南総中学	縄文～歴史時代集落跡、方形周溝墓群、古墳群	9号墳は31m前後の前方後円墳、隣接地（安久谷向ノ岱遺跡）平成2年度一部調査
37	江古田古墳群	江古田金環塚古墳（前方後円墳47m）女坂1号墳（周溝外周辺37m方墳）他	金環塚古墳より金環、勾玉、ガラス玉、刀子、鉄鍬、金銅製馬具等検出（雪解沢遺跡）



第2図 安須古墳群（1・2号墳）周辺地形図と主要古墳

者は菊間国造の、後者は上海上国造の奥津城として捉えられており、古墳時代の市原には、少なくとも2大勢力が存在していたことを今日に伝えている。

Aとした通称国分寺台周辺地域に存在する遺跡群は(19)、この2大勢力に挟まれた地域に存在し、全国的にも著名な遺跡が集中する地域でもある。弥生時代から古墳時代を中心とする時期には、出現期古墳（前方後円形墳丘墓）とされる神門古墳群や、王賜銘鉄剣で著名な稲荷台1号墳、盤龍鏡を出土した諏訪台48号墳、底部穿孔壺形土器及び素環頭大刀の他、素文鏡・玉等を検出した辺田1号墳（根田6号墳）等の墳墓の他、辺田1号墳の墳丘下における方形周溝墓2基の内部施設より、計10点の銅釧を検出した根田遺跡、弥生時代後期以降を中心として綿々と続く集落跡や墳墓群を形成する天神台・諏訪台遺跡等が特筆される。また周辺には人物埴輪等を検出した山倉1号墳をはじめとする山倉古墳群(21)や、古墳時代後期の集落跡を中心とする郡本大宮遺跡や千草山遺跡等が存在するものの、菊間・上海上両国造の奥津城と考えられる周辺地域のごとく、前期大型前方後円墳が存在しない地域でもあることや、上海上国造奥津城内に存在する全長45mの終末期前方後方墳である六孫王原古墳に継ぐ規模の終末期前方後方墳が比較的まとまって存在し、古墳時代終末期における上海上国造墳墓群との類似性が指摘できること等は注目しなければならない。そしてこの地が古墳時代以降における中心的な役割を果たしていくのは、律令制施行以後の奈良時代を中心とする時期であり、古代上総を代表する僧寺・尼寺の建立を期にさらに飛躍的發展を遂げたものと考えられる。そしてその時期には、古代官道と推定される幅6mの道路遺構を検出した山田橋表通遺跡(20)や道路遺構に接して掘立柱建物跡群と多量の緑釉・灰釉陶器を検出し、通常の集落跡とは種を異にする稲荷台遺跡や、市原郡家推定地付近に位置する郡本遺跡等が存在する。

次にBとした村田川及びこれに灌ぐ神崎川流域の様相を窺ってみよう。村田川及び神崎川下流域一帯は、前述した菊間国造及びその前身豪族の勢力基盤として捉えられており、特に村田川下流域南岸部においてはその奥津城としての大型前方後円墳をはじめとする多数の遺跡が存在する地域でもある。集落跡としては菊間遺跡・菊間手永遺跡・大厩遺跡等が存在し、三者は弥生時代中期以降における環濠集落跡としても古くから著名である。周辺には粘土槨2基が接合して検出され、内行花文鏡・珠文鏡・石釧・大刀・剣・鉄斧・鉈・水晶製勾玉・管玉・ガラス玉等を検出し、60m級の前方後方墳と推定される新皇塚古墳や、珠文鏡・石釧・刀子・瑪瑙勾玉・琥珀勾玉・琥珀棗玉・琥珀小玉・管玉・ガラス勾玉・ガラス小玉等を検出した径45mを測る円墳である大厩浅間様古墳をはじめとして、未調査であるものの権現山古墳、東関山古墳・姫宮古墳・大厩二子塚古墳等の古くから著名な前方後円墳や、径44mの円墳と考えられる菊間天神山古墳等の大型古墳が集中している。また対岸における千葉市南生実町周辺には大覚寺山古墳・七廻塚古墳・上赤塚1号墳等の著名古墳が存在し、後二者は立花・直刀・鉄製農工具・石製模造品等が検出され、古墳時代中期前半代の古墳としての類似点が指摘できると同時に、安須2号墳の編年上重要な位置を占めるものと考えられる。さてこの村田川に灌ぐ一支流でもある神崎川を遡っていくと、(22)・(23)番号を付した小田部新地遺跡と小田部向原遺跡が存在する。小田部新地遺跡では弥生中～後期の方形周溝墓14基や古墳・土壙墓・奈良時代以降の所謂方形周溝（方形区画改葬墓）等が検出され、方形周溝墓の1基は中央主体部が甕棺となる特異な例や、古墳時代の土壙墓からは珠文鏡が検出されるなど注目される遺跡でもある。また対岸の小田部向原遺跡では墳頂部周辺から元屋敷式土器を検出した周知の小田部古墳（墳丘墓）が存在する。この他弥生時代後期～古

墳時代後期にかけての集落跡などが検出されており、東国における古墳の出現期を考える上で神門古墳群と共に極めて重要な遺跡であろう。

今度はCとした養老川下流域右岸地帯の様相を概観してみたい。この地域は白鳳期に郡名寺院を伴って姉崎より移動したと考えられている上海上国造本来の本拠地と推定することが可能な地域でもある。その根拠のひとつとして、最近一部調査が実施された今富塚山古墳(16)の存在を無視することはできないであろう。ただ残念なことに墳丘の大部分は近年の大幅な削平を受け、内部施設は未調査のまま壊滅し、墳丘自体も本来の容姿を留めていないのである。しかしながら調査担当者である永沼律朗氏によって全長110m程の前期大型前方後円墳に復元され、また昭和41年の後円部削平時、鈴木仲秋氏によって撮影された写真から、内部施設は木炭藪ないしは木炭床と推定されている。この他調査によって検出された底部穿孔土器の存在等から、その築造年代は少なくとも4世紀代には遡り得るものであろう。この他5世紀前半代、全長40m前後の帆立貝式前方後円墳に推定することが可能な海保3号墳を含む海保古墳群や(18)、現状六角形の特異な形状を呈し、径60m前後の大型古墳改変の塚として捉えることが可能な海保大塚(17)の存在も考慮に入れなければならないであろう。そして白鳳～奈良時代には海上郡家(14)や今富廃寺(15)が存在しているのである。

さて、次はDとした養老川中流域左岸地帯の様相を概観してみよう。この地域は、先の神崎川と養老川支流が形成する分水界の台地上に存在する武士遺跡から、養老川が大きく迂回する台地上に位置する土宇遺跡までを対象とする。ただし近年の河川工事によって現状左岸地帯に存在する二日市場廃寺は、本来右岸地域に属する遺跡であることを明記しておきたい。これらの遺跡群のうち弥生一集落をほぼ完掘し、終末期古墳から火葬等を内部主体とする所謂方形周溝（方形区画改葬墓）を数多く検出した武士遺跡(24)、現状における有鉤銅釧検出例の東限とされる北旭台遺跡(29)、海郷に関連する「海□里長」の墨書土器を検出した門脇遺跡(31)、手焙形土器や布留Ⅱ式期に併行し、搬入品かと考えられる器台形土器を検出した土宇遺跡(33)等は特筆されよう。この他今富廃寺と同範関係の三重弧文鏡瓦を検出した武士廃寺(25)、地下式改葬墓を内部施設とする所謂方形周溝を検出した福増山神遺跡(26)、弥生方形周溝墓8基を検出した山田大宮遺跡(28)、弥生～古墳時代の竪穴住居跡が幾重にも重なって検出され、比較的遺構密度も濃い新堀叶台遺跡(27)・土宇下原遺跡(32)等が存在している。また河岸段丘及び河岸段丘上の微高地に存在する山田大宮遺跡・新堀叶台以外の遺跡からは、いずれも終末期方墳ないしは所謂方形周溝が検出されており、対岸における古代寺院と終末期方墳ないしは所謂方形周溝状遺構との関連及び類似性が指摘できよう。

さて、今度はEとした養老川中流域、牛久周辺地域の様相を概観してみよう。この地域は養老川に灌ぐ各小河川が形成する地域でもあり、本来ならばさらに細分されるべき地域でもある。しかしながら発掘調査例が極めて少なく、あえて一括して概略を述べておきたい。まずこの地域でもっとも広範囲な発掘調査が実施された遺跡として奉免上原台遺跡(34)があげられる。ここでは縄文時代早期の炉穴群が大量に検出されていることをはじめとし、古墳時代終末期から律令時代にかけての時期には、方墳ないしは所謂方形周溝を中心とした墳墓群が形成されている。さらに白鳳・奈良時代の所産として捉えられる四葉単弁蓮華文鏡瓦・三重弧文字瓦・凸面布目瓦等の遺物が比較的多量に検出されており、古代寺院跡本体の遺構検出を見なかったものの、墳墓と小規模寺院がある時期共存していた可能性が考えられる遺跡として重要である。この他詳細不明ながら銅鏃等を検出し、比較的古い時期に比

定できそうな牛久古墳群（矢原Ⅰ・Ⅱ号墳(35)）、方形周溝墓・古墳等の墳墓群を主体とする南総中学遺跡(36)、墳丘規模47mの前方後円墳ながら金環・金銅製馬具等を検出し6世紀前半代の江古田金環塚古墳や、径30m強を測り市原地域では比較的大型の終末期方墳に比定できる女坂Ⅰ号墳等を包蔵する江古田古墳群(37)が存在している。また養老川を挟んで対峙する南岩崎古墳群(11)では埴輪片が採取され、主軸長50m級の前方後円墳である吉野Ⅰ号墳が存在することをはじめとし、周辺には西国古横穴墓群(12)や50m級の前方後円墳3基を含む佐是古墳群(13)等が存在し、周囲一体に古墳等の墳墓群が濃密に分布しているのを見ることができる。

最後にFとした養老川中流域右岸地帯、及び小櫃川支流最奥部周辺の様相を捉えてみたい。この地域は近年のゴルフ場建設工事に伴い比較的広範囲にわたる発掘調査が実施されているにも関わらず、検出される遺構は極めて貧弱な地域でもある。しかし未調査や一部の確認調査のみで煙滅してしまった遺跡も多く、当域本来の全体像からすれば発掘調査における成果は極めて一部に過ぎないことが一目瞭然の地域でもあろう。まずこの地域で注目されるのは濃密に分布する墳墓群である。前述した安須古墳群(1・2)は言うに及ばず、釜神遺跡(3)に於いても相当数の円墳等が検出されており、(1・2・3)の番号を付した地点だけでも一大墳墓群を形成していることがすでに判明している。その他、広義の安須古墳群南端に位置付けられそうな高坂棒ヶ谷遺跡(4)においては、弥生後期の木棺墓と後期円墳が検出されており、またかつて光風台団地一帯に存在し、未調査のまま煙滅した60m級の前方後円墳を含む金比羅台古墳群（中高根古墳群）を含めることによって周囲一帯の様相が垣間見られてくるのである。そして近辺には、萩原野遺跡(5)・山見塚遺跡(6)・外迎山遺跡(7)・南名山遺跡(8)等が存在し、これら遺跡の共通点として特に重要なことは、弥生時代以降における主要遺構が、いずれも終末期方墳ないしはこれに連続する所謂方形周溝及び火葬墓であることと、周囲及び眼下には萩ノ原廃寺(9)・川原井廃寺(10)・今富廃寺(15)・二日市場廃寺(30)等の古代寺院の存在が顕著に認められる傾向があり、前述した上原台遺跡や、対岸における武士廃寺と武士遺跡及び福増山ノ神遺跡との類似関係が指摘できることであろう。おそらく古代仏教にかかわる古代寺院建立と、終末期方墳に変わる新たな墳墓体制である火葬等を埋葬施設の主体とする所謂方形周溝（方形区画改葬墓）及び火葬墓の出現は密接な関係にあるものと推定される。古墳時代の終末と律令時代の幕開けを告げる遺構が、このような限定された地域において比較集中して検出されることは極めて重要なことであろう。また周辺には「鎌倉街道」・「大街道」等の小字名が存在し、前述した古代街道と直結していたものと考えられていることから、古代においてはこの周辺が交通の要所に位置していたことが窺われよう。

以上、発掘調査が実施された遺跡を主体とし、広範囲に亘る周囲の歴史的概略を述べてきた。これらのことから安須1・2号墳を中心とする地域には、出現期古墳から終末期古墳に至る数多くの古墳が集中的に分布している状況が捉えられよう。中でも全国的にも稀な出現期古墳(前方後円形墳丘墓)や終末期前方後方墳が、比較的まとまって存在していることや、終末期方墳ないしはこれに連続する所謂方形周溝が群をなし、古代寺院跡周辺に検出される傾向が認められること、またこれら墳墓のうち古墳埋葬施設の主体は木棺直葬系であり、所謂方形周溝における埋葬施設の主体は火葬を中心とする改葬であること等は、この地域における墳墓の特徴と言っても過言ではなく、古墳時代の墓制を考えると、極めて重要な問題となろう。

第1 表関連文献等

- 1 木對和紀 「安須古墳群」『第8回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター 1993
- 2 平成3年度確認調査を実施
- 3 現在調査継続中
- 4 田中清美 「榑ヶ谷遺跡」『不特定遺跡発掘調査報告書(1)』市原市教育委員会1989
- 5 近藤 敏 「新生荻原野遺跡」『第5回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター1990
- 6 木對和紀 「山見塚遺跡」『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』財団法人市原市文化財センター1987
- 7 木對和紀 「外迎山遺跡」『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』財団法人市原市文化財センター1987
- 8 昭和62年度・平成元～4年度調査を実施
- 9 寺門義範他『千葉県萩ノ原廃寺発掘調査報告書』日本文化財研究所1977
- 10 須田 勉 「川原井廃寺と古代街道」『南総郷土文化研究誌11』1978
「房総の古瓦に関する覚書(2)ー川原井廃寺ー」『古代64』早稲田大学考古学会1979
- 11 田所 真他「吉野1号墳・南岩崎吉野遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会1987
- 12 杉山普作他『西国吉横穴群』西国吉横穴群発掘調査団1972
- 13 平成2年度一部調査を実施
- 14 小熊吉蔵 「西上総における古街道と国府郡家所在地との関係」『千葉県史跡名勝天然記念物7-4』1933
今泉 潔他「西野遺跡」『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』財団法人千葉県文化財センター1989
- 15 福岡 元他『今富地区遺跡発掘調査報告書』1982
- 16 永沼律朗 「今富塚山古墳確認調査報告書」財団法人千葉県文化財センター1991
- 17 杉山普作他「海保古墳の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館1990
- 18 中村恵次他「海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告4』市原市教育委員会1968
- 19 田中新史 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代63』早稲田大学考古学会1977
田中新史 「出現期古墳の理解と展望ー東国神門五号墳の調査と関連してー」『古代77』早稲田大学考古学会1984
石野博信 「出現期古墳の具体相」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室1983
橋本博文 「関東の出現期古墳とその背景」『古墳はなぜつくられたか』大和書房1988
浅利幸一 「神門古墳群ー神門三号墳の調査成果からー」『第3回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター1988他
浅利幸一 「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』財団法人市原市文化財センター1985
米田耕之助「根田遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』財団法人市原市文化財センター1986
米田耕之助他「諏訪台古墳群」『上総国分寺台発掘調査概要XII』市原市教育委員会1975
須田 勉他「諏訪台古墳群調査概要」上総国分寺台遺跡調査団1975
田中新史他「西谷・諏訪台・根田古墳群」「稻荷台遺跡の調査」「上総国分尼寺跡の調査」上総国分寺台遺跡調査団1980
滝口 宏他「加茂遺跡A地点の調査」「宮前遺跡の調査」「神門4号墳の調査」「將塚古墳群の調査」『上総国分寺台調査概報』1976
須田 勉他「上総国分僧寺跡ー寺域北辺部の調査ー」『上総国分寺台発掘調査概要XIII』市原市教育委員会1981
須田 勉他「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概要IV』市原市教育委員会1977
滝口 宏他『上総国分寺址調査報告』1967
須田 勉他「上総国分僧寺跡ー寺域北辺部における調査ー」『上総国分寺台発掘調査概要XI』市原市教育委員会1982
対馬郁夫他「I加茂遺跡C地点の調査」「II台遺跡B地点の調査」『上総国分寺台発掘調査概要III』市原市教育委員会1976
田中新史他「古墳の調査」「諏訪台古墳群の調査」「長平台遺跡の調査」「西広貝塚第3次調査」「上総国分尼寺の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団1982
滝口 宏他『上総国分寺』千葉県教育委員会1973
宮本敬一 「上総国分尼寺の伽藍と付属諸院」『月刊歴史教育』1981
滝口 宏他『東間部田古墳群』上総国分寺台遺跡調査会編1974
滝口 宏他『南向原』上総国分寺台遺跡調査会編1976
滝口 宏他『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査会編1977

- 田所 真 「諏訪台古墳群」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』財団法人市原市文化財センター1986
- 田中新史他 『「王賜」銘鉄剣概報』吉川弘文館1988
- 木對和紀 『郡本遺跡』財団法人市原市文化財センター1987
- 20 近藤 敏 「山田橋表通遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』財団法人市原市文化財センター1986
- 21 米田耕之助 「上総山倉一号墳出土の人物埴輪」『古代59・60併号』早稲田大学考古学会1976
- 22 山口直樹 『小田部新地遺跡』財団法人市原市文化財センター1984
- 23 大村 直 「小田部向原遺跡」『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』財団法人市原市文化財センター1991
- 24 須田 勉他 『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団1976
- 「武士遺跡」『千葉県文化財センター年報No13』財団法人千葉県文化財センター1987
- 「市原市武士遺跡」『千葉県文化財センター年報No14』財団法人千葉県文化財センター1989
- 「市原市武士遺跡」『千葉県遺跡調査研究発表会』千葉県文化財法人連絡会1989
- 25 須田 勉他 『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団1976
- 26 浅利幸一 『福増山ノ神遺跡発掘調査報告書』財団法人市原市文化財センター1989
- 27 大村 直 『新堀叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター1992
- 28 米田耕之助 『山田大宮遺跡』財団法人市原市文化財センター1986
- 29 木對和紀 『市原市北旭台遺跡』財団法人市原市文化財センター1890
- 30 須田 勉 「房総の古瓦に関する覚書(1)」『古代64号』早稲田大学考古学会1978
- 郷掘英司他 『市原市二日市場廃寺確認調査報告』千葉県教育委員会1984
- 31 小林清隆他 『門脇遺跡』財団法人千葉県文化財センター1985
- 32 近藤 敏 「土宇下原遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』財団法人市原市文化財センター1986
- 33 柿沼修平他 『土宇遺跡』日本考古学研究所1979
- 34 田中清美 『奉免上原台遺跡』財団法人市原市文化財センター1992
- 35 石井 昭 「牛久古墳群発掘概報」『市原地方史研究第7号』市原市教育委員会1970
- 36 倉田芳郎他 『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会1978
- 忍澤成視 「安久谷向ノ岱遺跡」『平成2年度市原市内遺跡群発掘調査報告』1991
- 37 武田宗久他 『上総江古田金環塚古墳』市原市教育委員会1985
- 武田宗久他 『上総女坂1号方形墳』市原市教育委員会1969
- 金丸 誠他 『市原市雪解沢遺跡』財団法人千葉県文化財センター1984

第II章 遺構と遺物

1 古墳

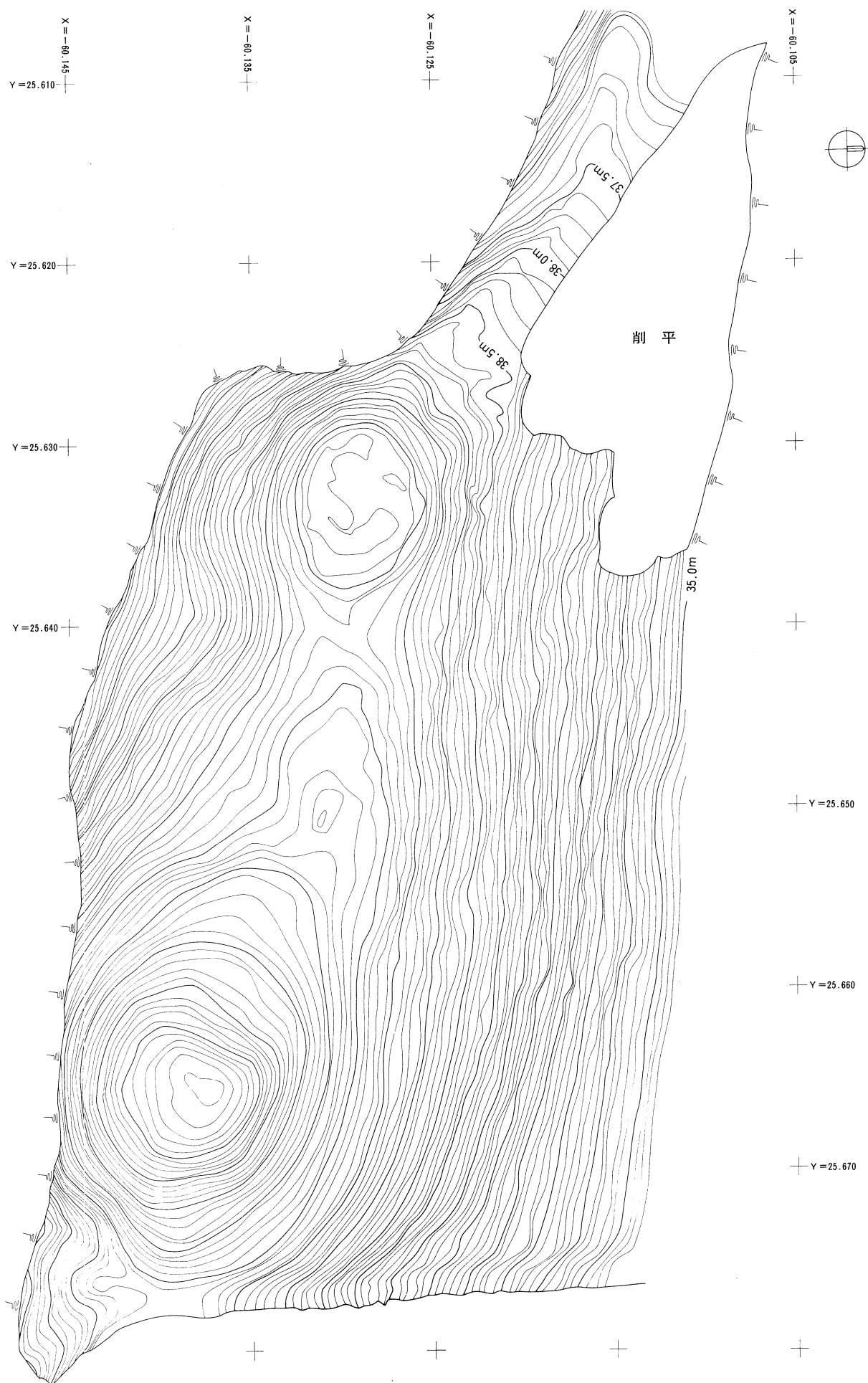
1号遺構

位置と現況 調査対象範囲の西側に存在する。瘦尾根上に立地しており、調査前の墳丘規模は比較的大きく見えたが、現況では墳形を確定することはできなかった。また進入道路から墳頂部の一部に至るまで碎石等が敷き詰められており、見かけの墳形以上に遺存状況は不良である。

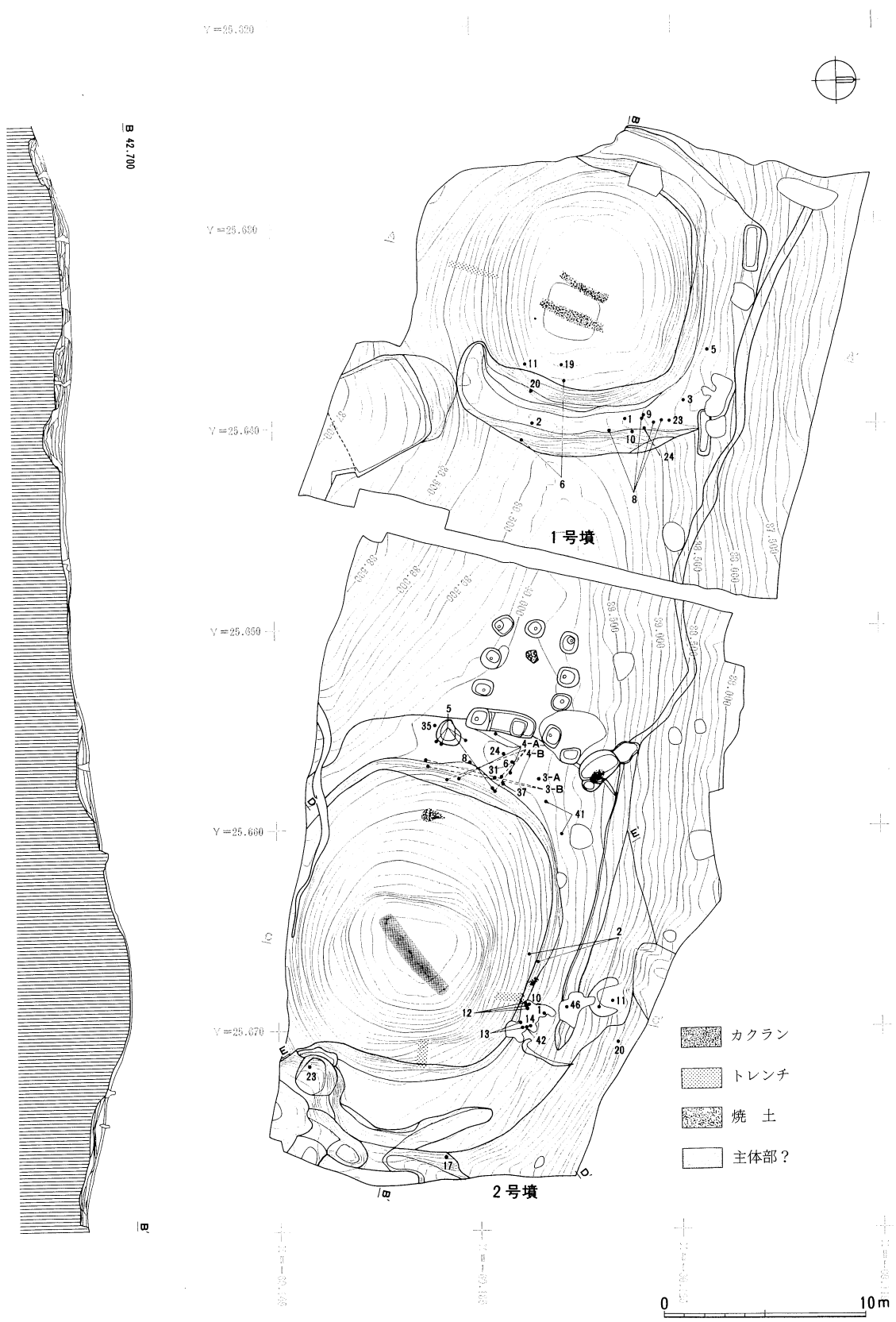
墳丘と周溝 墳丘は旧表土である自然堆積黒褐色有機質土層の上面に、直接盛土によって構築されている。封土はローム主体層と有機質土主体層、および西側周溝底側面の地山となる白灰色粘土ないしは灰色山砂等をブロック状に交互に積み上げて構築されている。現存する周溝は全体の3/4以上検出されているが、全周に至っておらず、特に周溝が検出されなかった南側は、地滑り等によって既に流出したか、或いは当初から構築されていなかった可能性が考えられる。またこれと対応する北側周溝は、地山削り出しによるテラス状を呈しており、両側壁とも明瞭に検出された周溝は東西周溝部の範囲であることから、立地する地形にかなり制約されて構築された状況が窺われる。このうち最も遺存状況の良好な東側周溝は、上端幅1.92m、深さ0.84mを測り、断面は逆梯形、覆土は自然堆積の状況を示している。周溝が残存したB～B'間における内径は10.98mを測ることから、概ね11m規模の古墳として捉えることができる。しかしながら、地形的に制約された本墳の平面形状については明確に円墳とも方墳とも決定しがたく、出土遺物や北側周溝の上端形状等から判断すれば、やや不確定な要素を含みながら、現状では円墳に近い形状の方墳として捉えられるであろうか。また現状における墳頂部平坦面の大半、及び一部旧表土以下に達する範囲からは、前述した碎石の他ビニール片・重機キャタピラ痕跡等が検出されており、本来存在していたであろう墳丘内内部施設は既に削平されてしまったものと推定される。

内部施設 方台部内には何の施設も検出されなかった。しかしながら、北側周溝底面及び一部周溝プランを離れて長方形土壇2基を検出している。2基とも周溝内覆土を完全に除去した後、初めてその存在を確認したものであり、本遺構に直接伴うものと考えられる。No.1の番号を付した土壇は、長径2.27m、短径0.77m、深さは0.41mを測る。底面はほぼ平坦であり、壁はやや急激に立ち上がっている。覆土は有機質土中に少量のローム粒、ロームブロックがほぼ均一に混入する単層であり、やや引き締まっている。一見芋穴ふうにも見えるが、木棺等を使用しない土壇墓であるものと考えられる。遺物はまったく検出されなかった。No.3の番号を付した土壇は、一部竹根によって削平されている。長径2.26m、短径0.63m、深さは0.31mを測り底面はやや平坦さに欠くものの、壁・覆土ともNo.1の番号を付した土壇墓と類似していることから、土壇墓の範疇で捉えてよいものと考えられる。遺物はまったく検出されなかった。

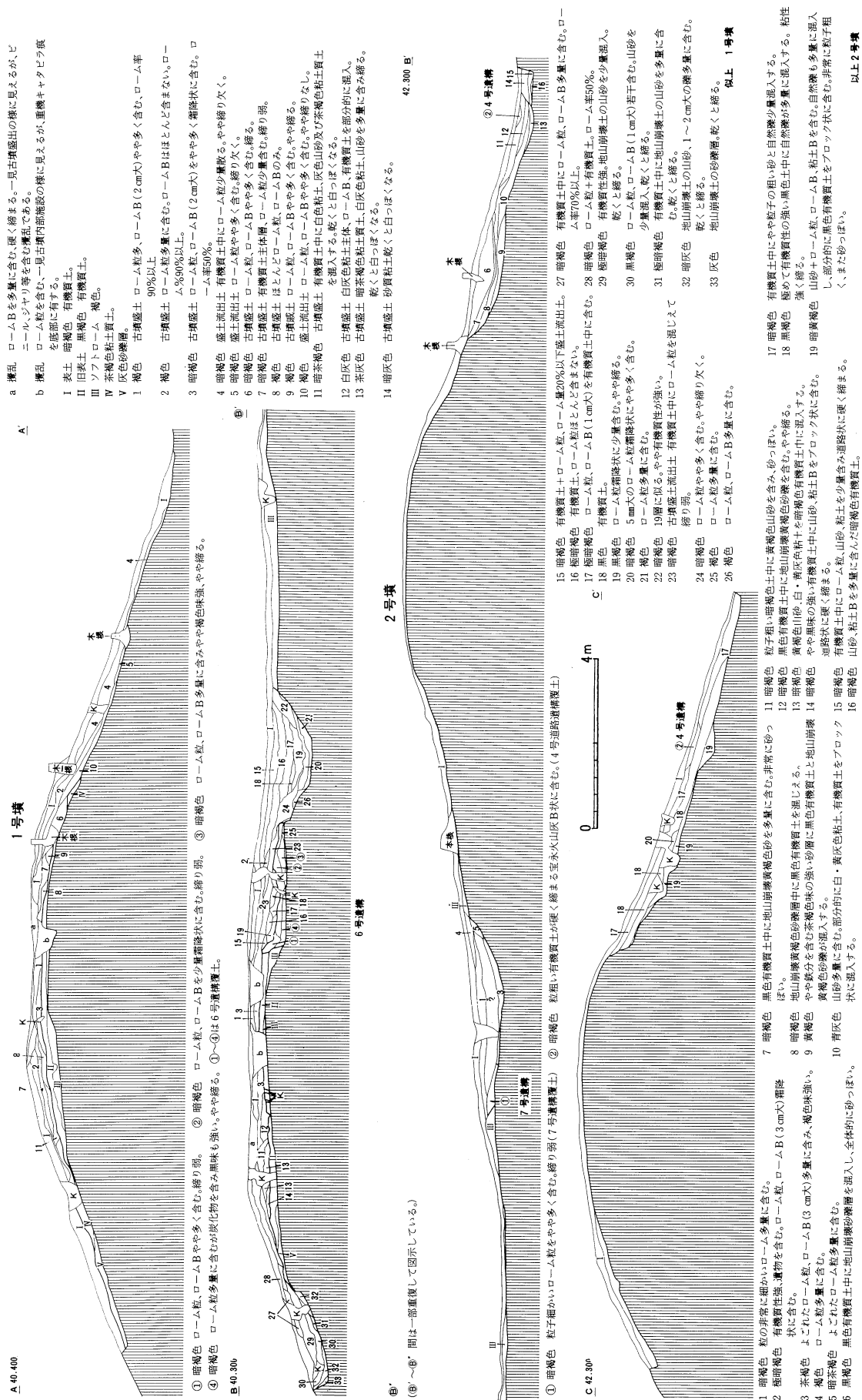
この他No.2の番号を付した長径0.50m、短径0.44m、深さは最大0.57mを測る土坑状の落ち込みが検出された(図版7)、掘り上がりプランが遺跡内いたるところから検出された竹の子採取坑と類似するものの、覆土がやや締まる異質なもので、竹の子採取坑と断言することができない。ここでは規模と写真の掲載に留めておきたい。



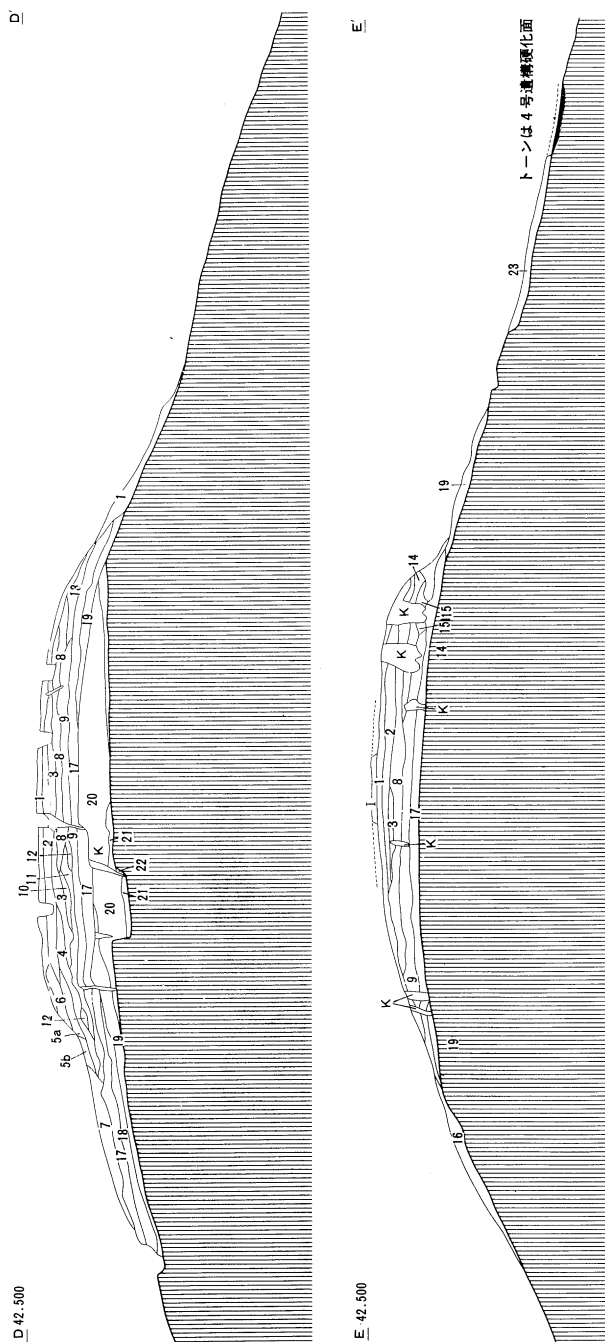
第3図 安須古墳群（1・2号墳）現況地形測量図



第5図 安須1・2号墳実測図



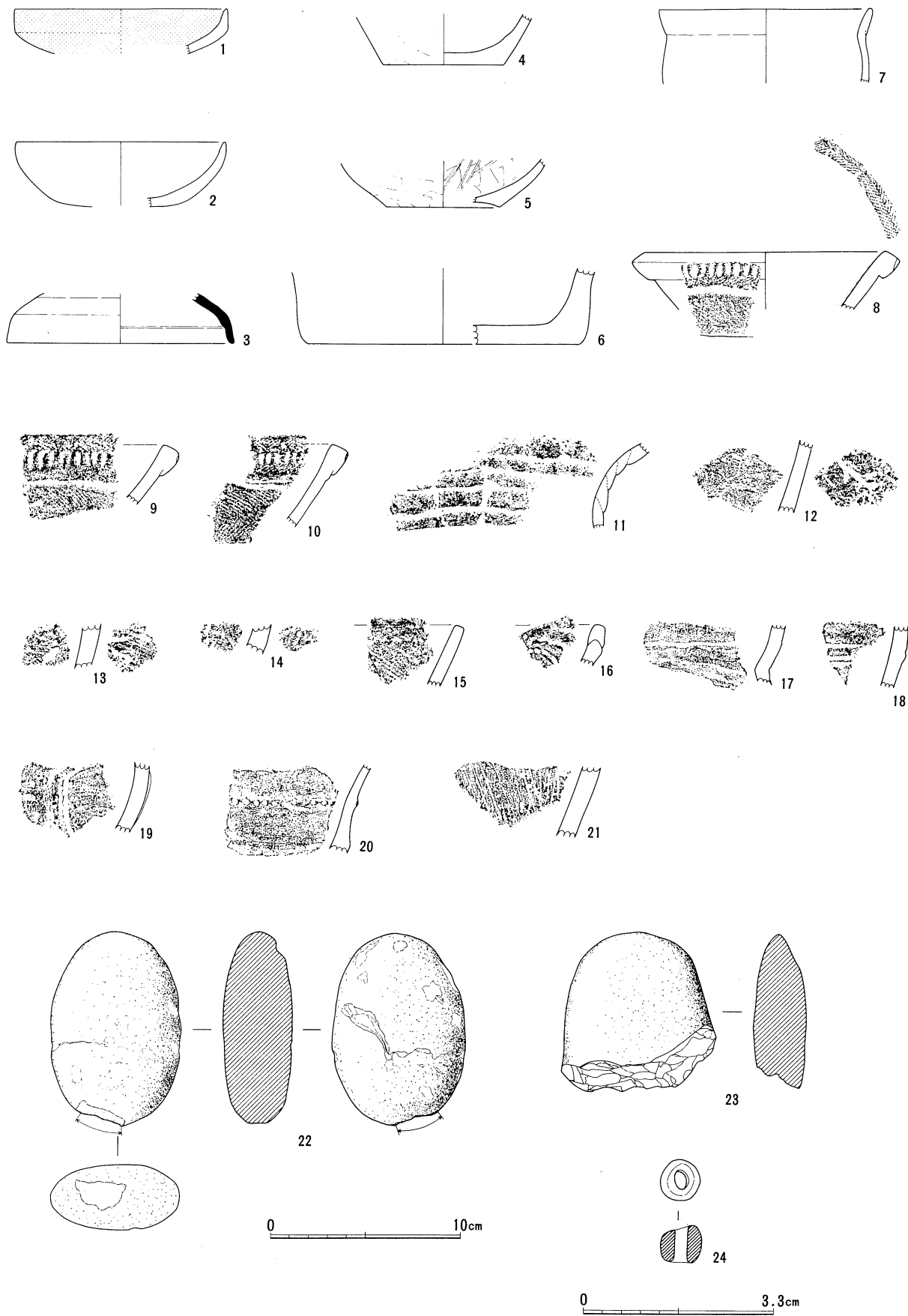
第6图 1·2号墳実測図



第7図 2号墳美測図

遺物 周溝及び墳丘盛土内より計292点の遺物が検出されたが、いずれも細片ないしは小破片であり、このうち24点の遺物のみが図示可能であった。本遺構に関わる土師器・須恵器片は、全体で114点検出されているものの依存度が極めて悪く、図示可能遺物は僅か6点にすぎない。細片も含めた遺物のうち古墳と同時期と認定し得る資料は、No.1～3の番号を付した遺物であろう。この他弥生土器計123点、縄文土器・石器等が55点検出されている。これらの遺物のうち最も多量に検出された弥生土器は、下層に存在する6号遺構より古墳築造に伴って流入したものと考えられる。また縄文土器・石器等は、いずれも本遺構に直接伴うものではない。この他周溝底より検出されたNo.24のガラス小玉があり、本遺構ないしは6号遺構からの流出と考えられるが、現状ではどちらに属するのか不明である。

- | | | |
|----------|---------|---|
| 1 現表土。 | 12 暗茶褐色 | オレンジ色を主体とする地山砂礫層が墳丘盛土として使用されたものが主体。 |
| 2 暗褐色 | 13 暗灰褐色 | 粘土、山砂、自然礫が多量に含む。 |
| 3 極暗褐色 | 14 暗褐色 | 有機質土中に白灰色粘土、自然礫や多く含む。やや黒味強く締る。 |
| 4 暗褐色 | 15 黒褐色 | 有機質土中にローム粒、粘土粒含む。やや締り弱く自然礫少量含む。 |
| 5 a 極暗褐色 | 16 黒褐色 | 有機質土主体、若干粘土粒を混入する。 |
| 5 b 極暗褐色 | 17 黒褐色 | 有機質土中に自然礫、ローム粒、粘土粒等を含む。17層に近似した土層中に、墳丘盛土が混入したかの状況を示す。 |
| 6 暗褐色 | 18 褐色 | 有機質土、旧表土、明瞭な断面を認めることができる。 |
| 7 暗褐色 | 19 暗茶褐色 | ソフトローム層に似るがやや褐色味少ない。縄文土器を含む置物包含層で、層序的にはこの下にソフトローム層が位置する箇所が存在する。 |
| 8 暗灰褐色 | 20 白灰色 | 粘土質土層、粘性強く硬く締る地山層。チャコレート色を呈している。 |
| 9 極暗灰褐色 | 21 明褐色 | 粘土層、明瞭な断面として認められる。 |
| 10 暗灰色 | 22 白灰色 | オレンジ色を呈する砂礫層、礫の大きさは1～5cm。明瞭な断面として認めることができる。 |
| 11 暗灰褐色 | 23 暗褐色 | 粘土層中に自然礫を含む。断面によって20と21層が混合した層と考えられる。ローム粒多量に含む。 |



第8図 1号墳及び周辺出土遺物実測図

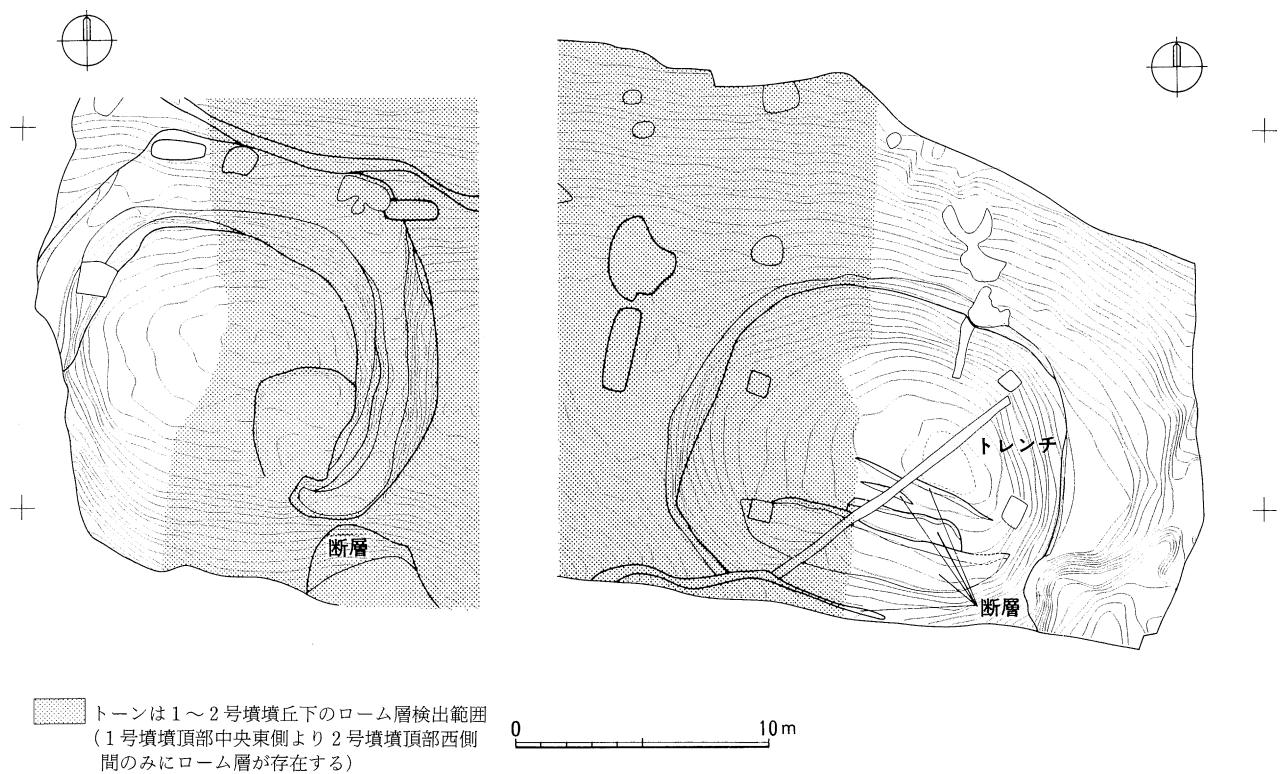
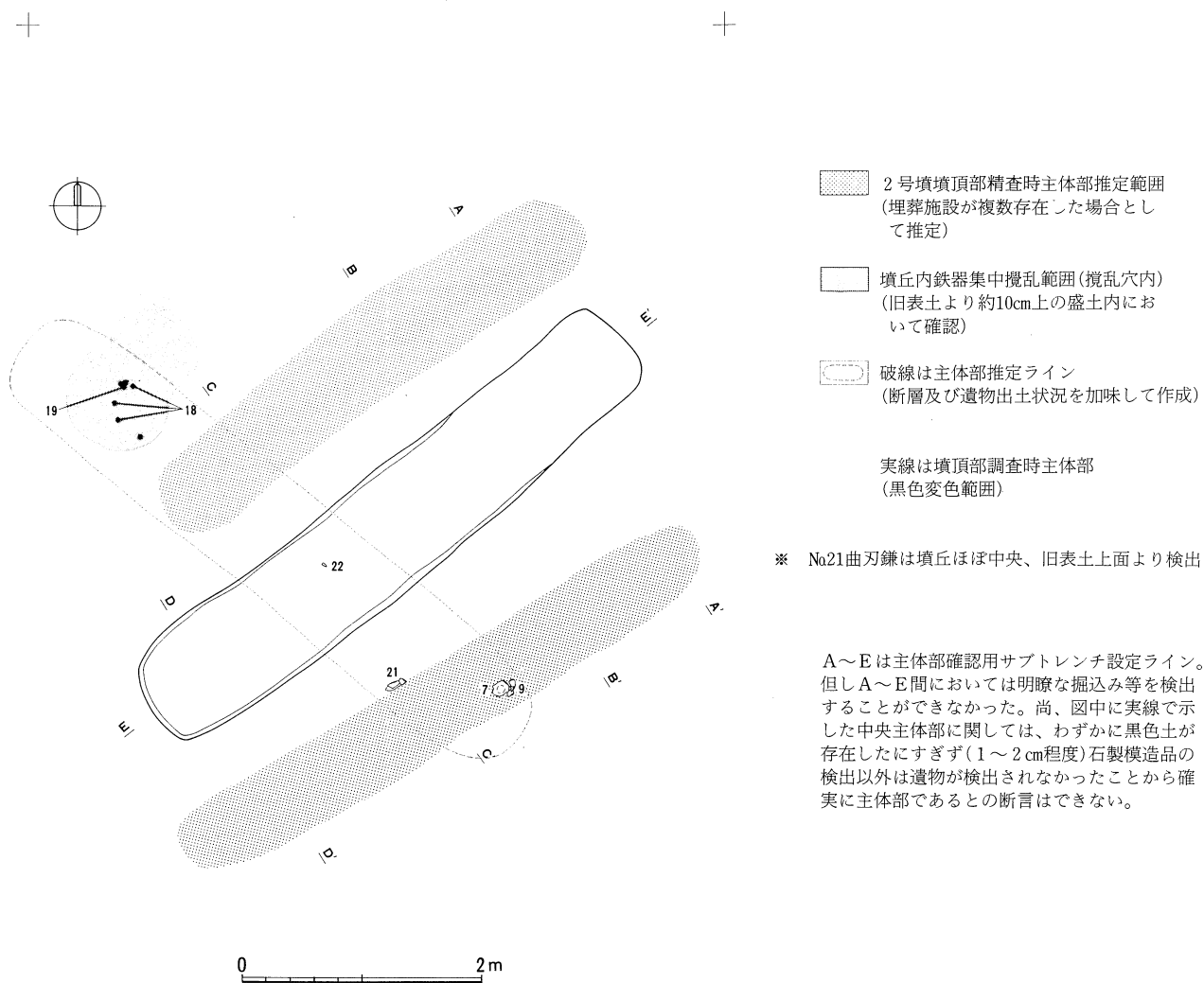
2号遺構

位置と現況 1号遺構の東側に隣接し、見かけの墳丘は1号遺構より更に大きくかつ良好に見える。しかしながら、現在の竹林状況を反映してか、墳丘いたるところに無数の竹の子採取坑が存在している。また旧表土層以下の調査によって墳丘構築以降における断層、或いは地滑り痕跡が確認されるに至り、遺存状況は見かけの予想以上にはるかに不良であることが判明している。

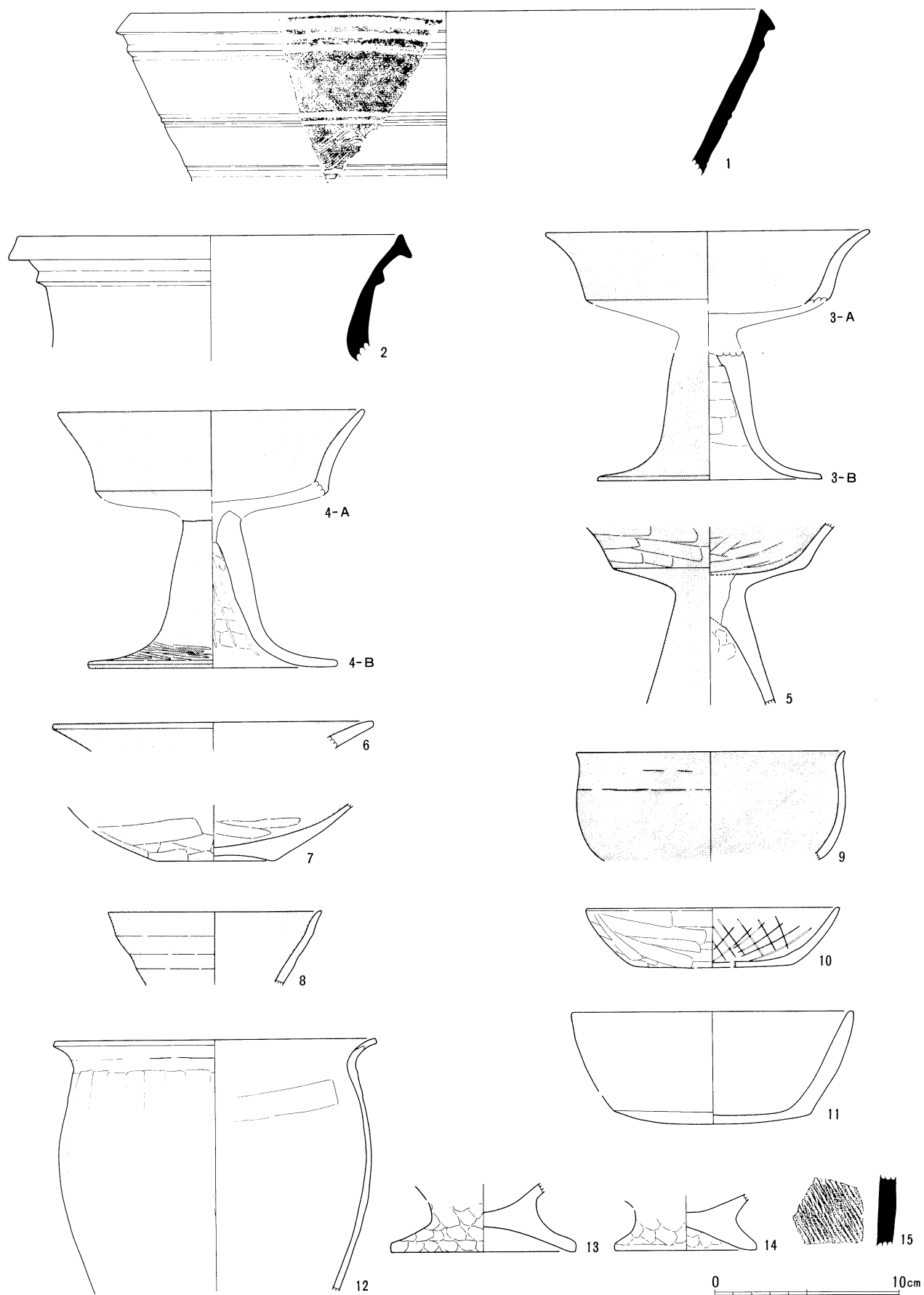
墳丘と周溝 墳丘は旧表土である自然堆積黒褐色有機質土層の上面に、直接盛土によって構築されている部分と、地山削りだし、ないしは自然地形を巧みに利用して構築されている箇所が存在する。封土はローム・有機質土・白灰色粘土・灰色山砂・自然礫等を交互に積み上げることによって構成されており、その範囲は現状における墳頂部を中心としてD～D'間で10m、E～E'間で8m程の範囲に高さ0.5m程残存し、これ以外の範囲が地山削りだし、ないしは自然地形を巧みに利用して構築されているものと考えられる。周溝は全体の3/4程検出されているが、墳丘の南側は現状における勾配が急激であり、またオーバーハングしている為非常に危険な状況であり、図示以上の調査に及べなかった。したがって全周していたかどうかは判明していない。しかしながら仮に全周していたとしても、墳丘南側の現状における急勾配や、旧表土以下の調査によって得られた断層等によって、既に流出してしまっている可能性が考えられる。北側及び東側周溝は、1号遺構同様地山削りだしによるテラス状を呈しており、両側壁とも明瞭に検出された周溝は西側周溝部のみである。その規模は周溝上端幅4.82m、下端幅2.91m、深さは墳丘側上端より0.84mを測り、断面は緩やかな逆梯形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。また本墳も1号遺構同様、立地する地形にかなり制約されて構築された状況が窺われ、内径長軸14m、短軸13m程の規模を呈し、東西にやや長い歪な状況で検出されているものの、現状では概ね方墳として捉えておきたい。

内部施設 墳頂部精査中、現表土よりおよそ1cm程掘り下げたところでNo22の番号を付した滑石製の刀子形石製模造品が検出された。このことによって、本墳墳頂部周辺には、極めて現表土に近い位置に内部施設が存在する可能性が考えられた。また出土遺物における本墳の所属する年代観等から、さらに複数の内部施設を保持していることも十分予測されたことから、慎重に墳頂部周辺の精査を行ない、内部施設の把握に努めたが、現況が密集した竹林であった為、びっしり生えた竹根、及び竹根より生じる樹液等によって明瞭なる内部施設プランの検出は極めて困難な状況であった。そこで刀子形石製模造品が検出された周囲の状況を観察してみたところ、周囲に比べ僅かに有機質性の強い土が東西方向に3箇所存在しているかの状況であり、一先ずこの変色範囲を以て内部施設プランとして捉えることとし、A～Eの土層観察用のベルトを残しながら調査を進めることにした（第9図）。

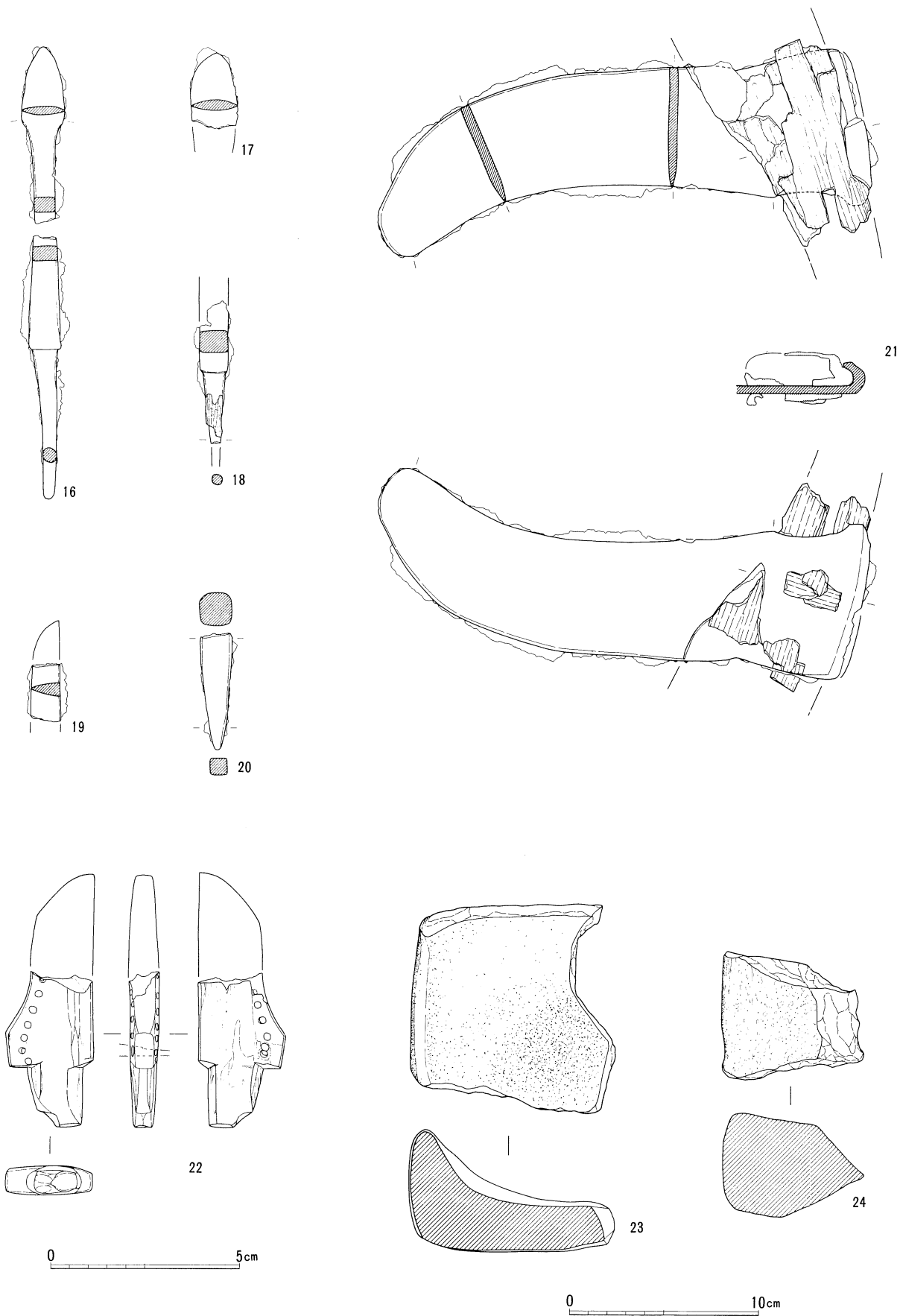
また調査の都合上、石製模造品が検出された中央プランを仮称中央主体部とし、北及び南側に認められたプランをそれぞれ仮称北及び南主体部として有機質土変色範囲の調査を進めた。ところが、仮称中央主体部からは前述した刀子形石製模造品1点のみ、北及び南主体部では1cmに満たない僅かに有機質性の強い土層内からは何の遺物も検出されず、またA～Eの土層観察用のベルトを観察しながらトレンチによって表土よりおよそ20cm程掘り下げているにもかかわらず、明瞭な堀込みないしは木棺痕跡等を検出することはできなかった。ただしこの段階で仮称中央主体部範囲内だけは、B～Dの土層観察用のベルト内においても仮称北及び南主体部とは異なる厚さ1～2cm程の極めて有機質性の強い土層が検出されており、現状においては不確定な要素も含みながら本墳における内部施設棺底面



第9図 2号墳埋葬施設実測図, 1～2号墳間におけるローム堆積範囲及び断層実測図



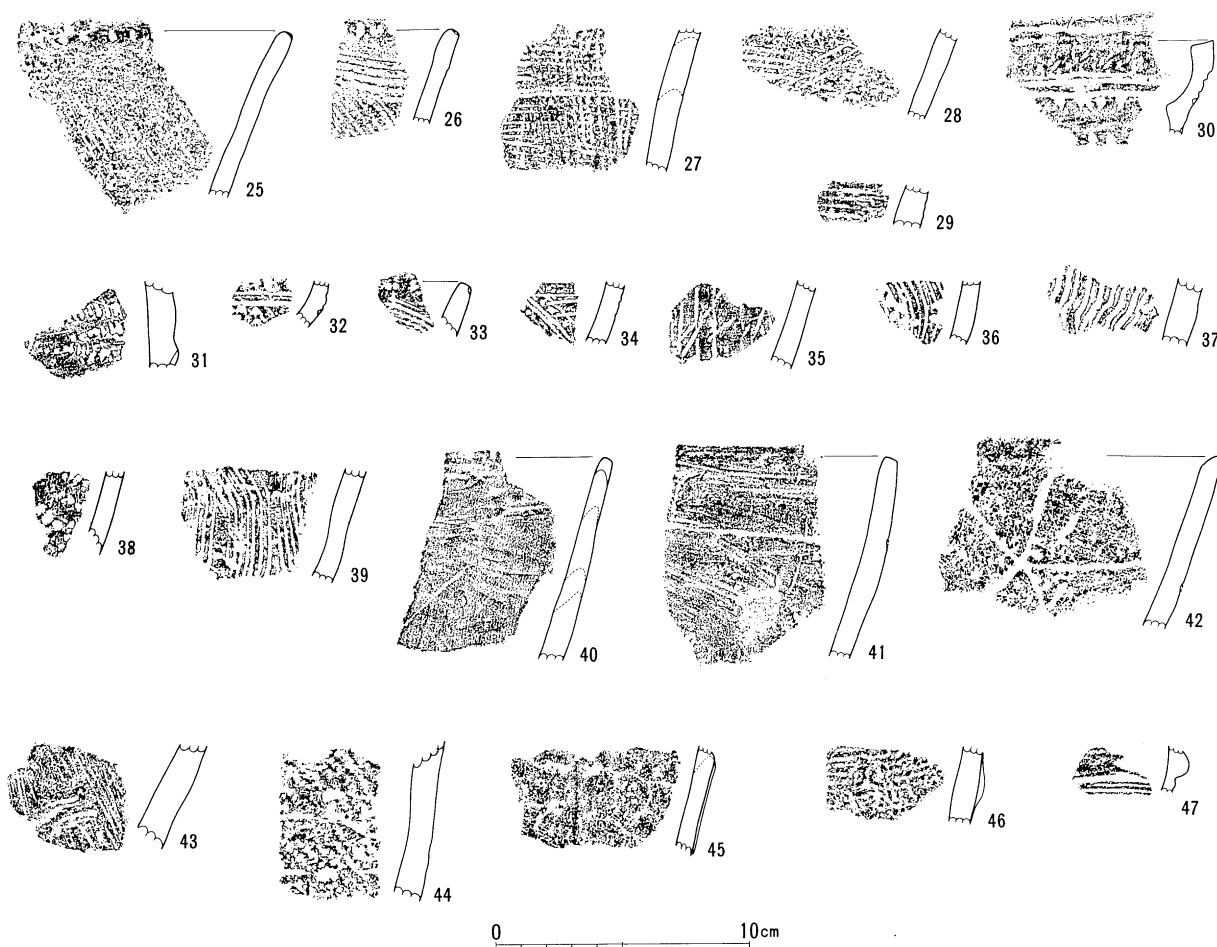
第10図 2号墳及び周辺出土遺物実測図 1



第11図 2号墳及び周辺出土遺物実測図 2

ないしは掘り方底面として捉え、平面図作成に取り掛かった。その後墳丘断面観察用のベルトを残して墳頂部全域をA～Eの土層観察用トレンチ底まで慎重に掘り下げたところ、南主体部範囲内において表土層上面よりおよそ8cm程掘下がったところでNo7・9の番号を付した赤彩土師器が検出された。いずれも本墳における周溝内から検出された5世紀代の土師器と同時期段階の製品に比定できることから、やはりこの範囲においても内部施設が存在した可能性が考えられたが、前述のごとく明瞭なるプラン及び掘込み等は検出されなかった。したがってこの時点では、石製模造品が検出された中央プランのみ本墳の内部施設として捉えられるものと理解していた。

ところが墳丘を徐々に掘り下げていく過程において、墳頂部よりおよそ60cm程下がった旧表土直上盛土内に存在した竹根ないしは竹の子採取坑による攪乱内よりNo16・18・19の番号を付した鉄鏃片が（No16は同攪乱内より検出時は、1個体と思われるほど接近した位置で検出されながら、一括して取り上げられたもの）、また旧表土上面からは曲刃鎌が、墳頂部直下に据え置かれたような状況で検出されたことや、旧表土以下の調査によって得られた断層が、実は墳丘自体にまで及んでいたことが判明するに至り、これまで理解していた墳頂部中央における内部施設に対して大きな疑問を抱かせる結果となった。即ち土層断面から墳丘構築以降に断層が発生しているとは明白であり、各遺物の出土状況から第9図破線で示すような状況で内部施設が存在していた可能性が考えられるようになったのである。尚、このことについては、最後のまとめでもう一度触れることにしたい。



第12図 2号墳及び周辺出土遺物実測図 3

遺物 墳丘及び周溝内より計559点の遺物が検出された。その内訳は、縄文土器82点・土師器409点・須恵器4点・近世陶器2点・石器3点・割礫39点・鉄器片20点であるが、細片が多く図示できたものは47点にすぎない。このうちNo.2～9・16～19・21～22の番号を付した遺物は、いずれも本遺構に直接伴うものと考えられる。この他、歴史時代の土器としてNo.10～14が北側周溝攪乱付近より比較的まとまって検出され、この付近に、既に流出してしまった竪穴住居跡等の遺構が存在していた可能性が十分考えられる。

3号遺構

位置と現況 2号遺構の東側、調査区域東端に存在する。現状では馬の背状の尾根としか見えず、コの字状の周溝部？を検出しなければその存在すら分からなかった。

墳丘と周溝 遺構の大部分は調査区域外に存在し、また北側及び西側周溝部土層断面によれば（2号遺構B～B'参照）、この範囲のみ攪乱を挟んで周溝部の方が方台部内盛土？を削平しているかの状況であり、本遺構が古墳ないしは方形周溝墓等であるものとは断言し得ない。しかしながら、区画溝によって区切られた方台部内における現表土以下の層序では、地山と考えられる黄褐色山砂層の上にローム粒等を含んだ層序2枚が存在しており、明らかな人為的盛土ないしは2号遺構墳丘流入土であるものとは考えられない。また第3図以下におけるコンター図等からもこの付近に何らかの遺構の存在が考えられることから、一先ず古墳的遺構として取り扱っておきたい。その規模は方台部内径5.1m、周溝部の深さは40cm前後を測る。方台部中央西側周溝部が途切れる特徴的な形態を呈し、周溝端部の一方が底面よりおよそ7cm程土坑状に掘下がっている以外、周溝断面は概ね逆梯形を呈している。覆土は自然堆積の状況を示しながらも、上層の一部に宝永火山灰を含んでいる箇所が存在している。この他方台部内盛土？の一部まで影響する現赤道が存在し、掘込み等は検出されないものの部分的に硬く引き締まった箇所が認められた。

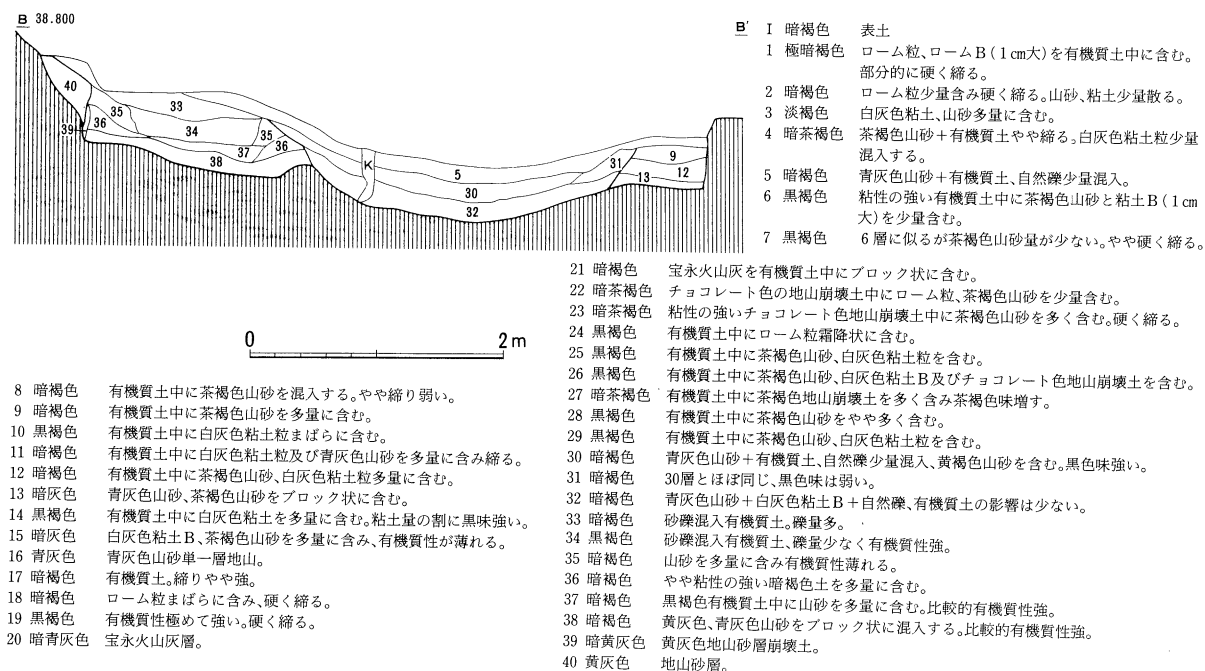
内部施設 本遺構に関わる内部施設は、今回の調査範囲内において検出されなかった。しかしながら周囲にNo.4・5の番号を付した遺構が検出されているので触れておきたい。（第13図）

No.4はNo.5に覆土の一部を削平されて存在し、平面形状は不整円を呈する土坑である。長径2m、短径1.75m、深さは確認面より90cm前後を測り、残存する西側壁立ち上がりがオーバーハングすることからフラスコ状ピット的な性格を有する遺構として捉えることができる。地山砂礫層中に掘込まれ、底面は緩やかな凹凸を呈し覆土は自然堆積の状況を示している。底面よりおよそ50cm程浮いた状況で、第11図23の番号を付した石皿が検出されている。No.5はNo.4の覆土を削平して存在し、更に調査区域外にのびる遺構である。調査区域内における地山に掘込まれた平面規模は2.9×1.85m、深さはB～B'間における覆土残存高からして、1.3m前後に推定することができる。地山砂礫層中に掘込まれ、底面は緩やかなU字形を呈し、覆土は自然堆積の状況を示している。遺物はまったく検出されなかった。

遺物 北側周溝覆土最上層から第11図17の番号を付した鉄鏝片が検出された以外、まったく検出されなかった（出土位置については第5図を参照）。しかしながらその出土状況等を考えると、本遺構に直接伴うというよりは、むしろ2号遺構から流出した遺物が紛れ込んでしまったと考えた方が無難であろう。



第13図 3号遺構周辺実測図 1



第14図 3号遺構周辺実測図 2

2 道跡

4号遺構

調査区域北側を東西方向に約50m程走る道跡である。幅30～50cm、深さ10～20cm前後を測り、浅いU字形を呈する底面の大部分が硬化している。覆土は粒の粗い有機質土を主体とし、所々に宝永火山灰をブロック状に含んだ箇所が存在し、全体的に硬く引き締まっている。

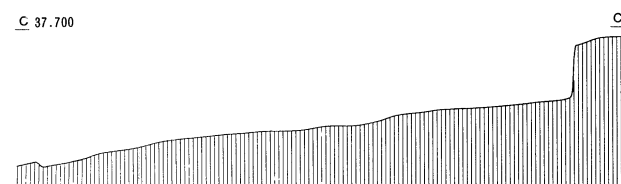
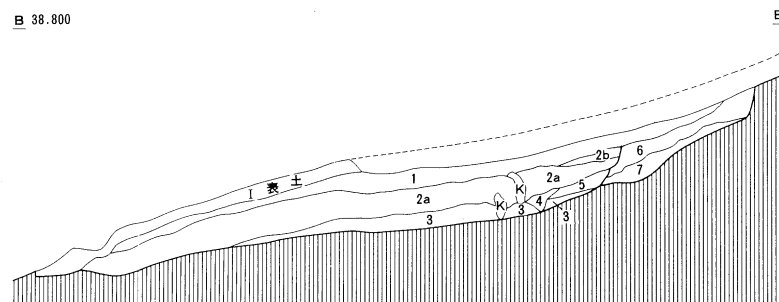
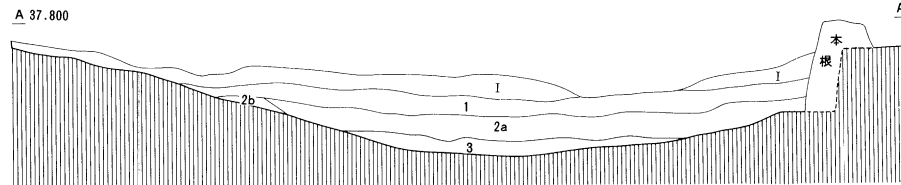
遺物 まったく検出されなかった。しかしながら覆土中に宝永火山灰を含むことから、少なくとも近世遺構であることが判明している。

3 住居跡

5号遺構

1号遺構南側の斜面に存在する竪穴住居跡である。南北方向に走る地滑り跡によって、覆土の大部分と南北両壁は既に流出しており、遺存状態は極めて不良である。しかしながら残存した東南コーナー部及び東西壁によって、一辺4.7m前後の方形プランを呈する遺構規模として復元することができる。深さは確認面から50cm前後を測り、底面は平坦ではなく、遺構中央部が緩やかに窪みながら南側に向かった緩斜面を呈している。硬化面はまったく存在せず、ピット・竈等は検出されなかった。

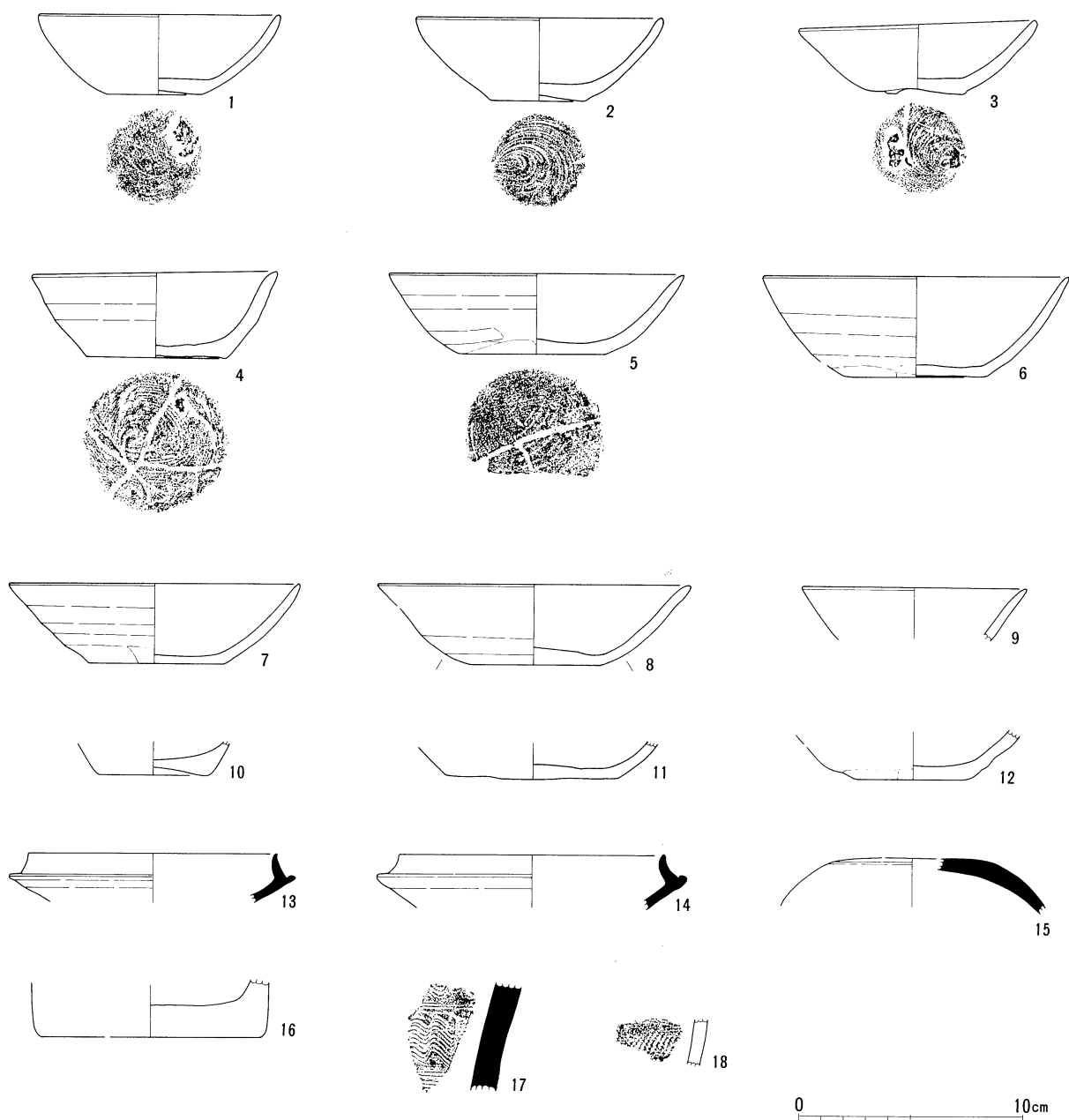
遺物 計18点の図示可能遺物が検出された。本遺構に直接伴うと考えられる1～12の番号を付した遺物の中でも、依存度の高い製品は全て底面密着の状況で検出される傾向が認められた。この他の遺物は、いずれも覆土中より散在的に検出されたものである。



- | | | |
|-----|------|--|
| 1 | 暗茶褐色 | 粒子粗、粘性強、乾くと曰っぽくなる。 |
| 2 a | 黒褐色 | 粒子粗、粘性強くやや粒の細かいロームB含む。 |
| 2 b | 黒褐色 | 粒子やや細かい。粘性強。 |
| 3 | 暗褐色 | 粒子粗、部分的に山砂、粘土B含む、締る。 |
| 4 | 黒褐色 | 有機質性強、少量の山砂含む。 |
| 5 | 暗褐色 | 1 cm大の粘土B少量含む。 |
| 6 | 極暗褐色 | 有機質性強、少量の山砂 1 cm大の粘土B若干含む。 |
| 7 | 暗褐色 | 山砂を含んだ茶褐色粘性土、チョコレート色地山粘土質土に比べ硬度がかなり弱い。 |

0 2 m

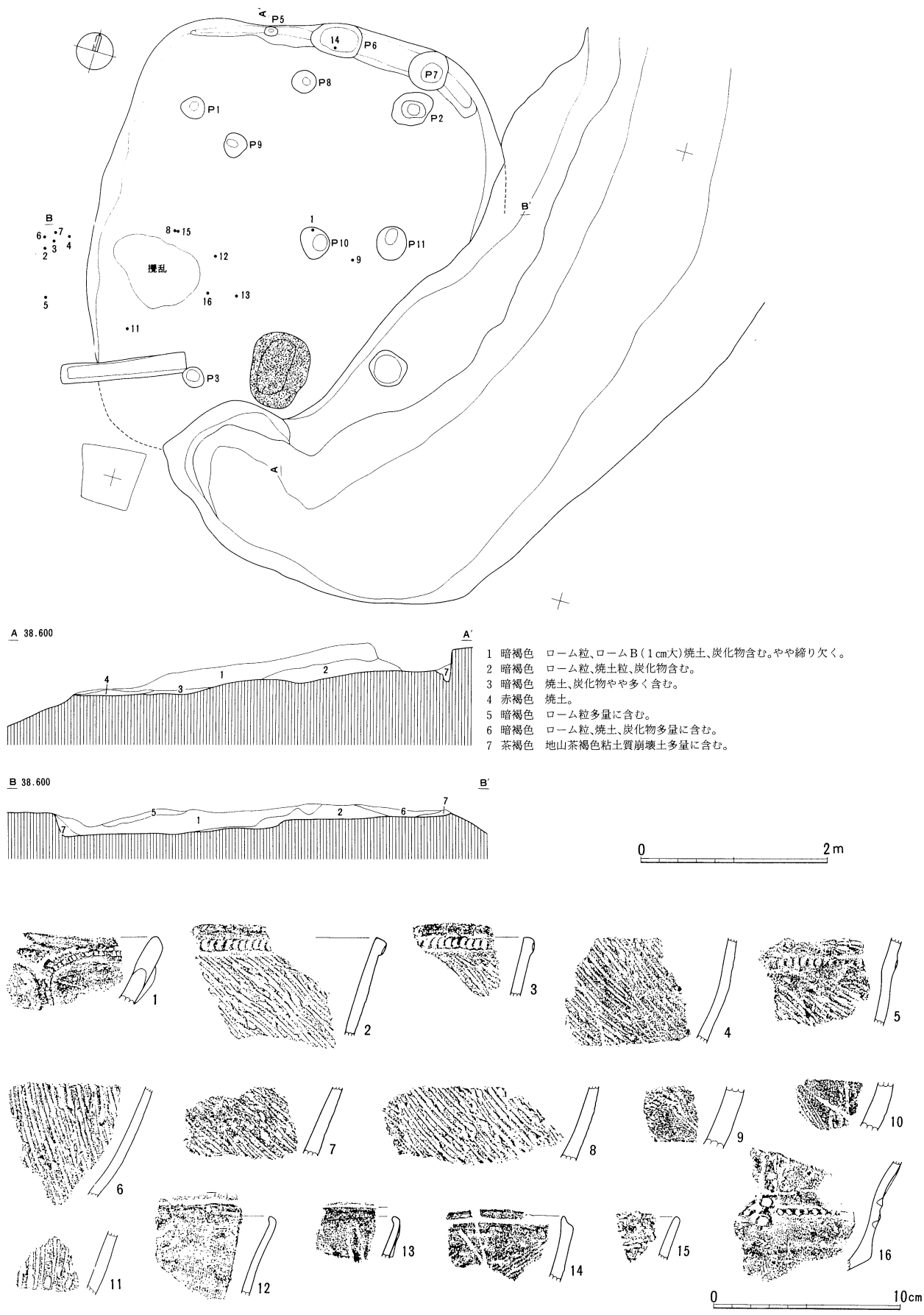
第15図 5号遺構実測図



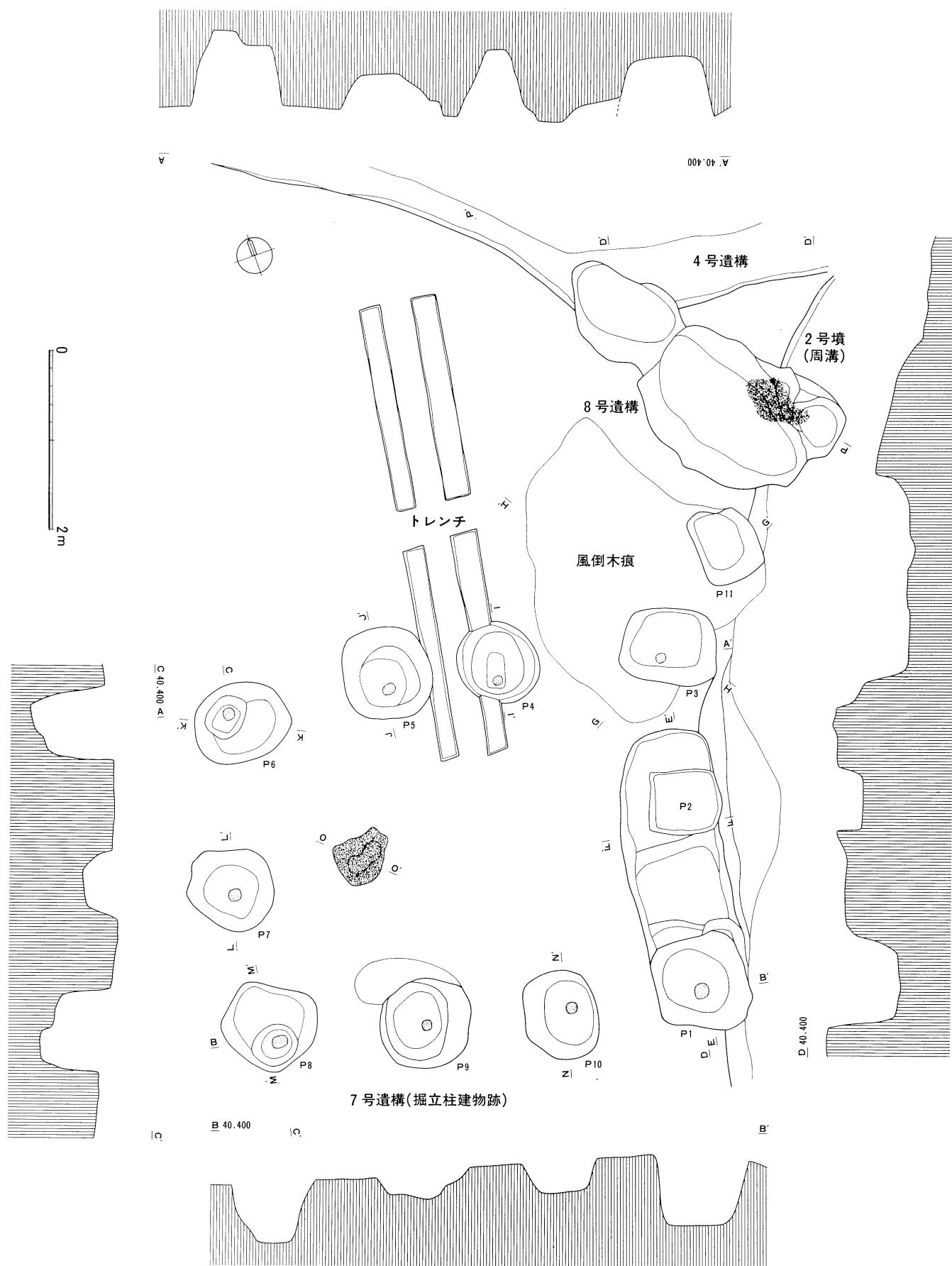
第16図 5号遺構出土遺物実測図

6号遺構

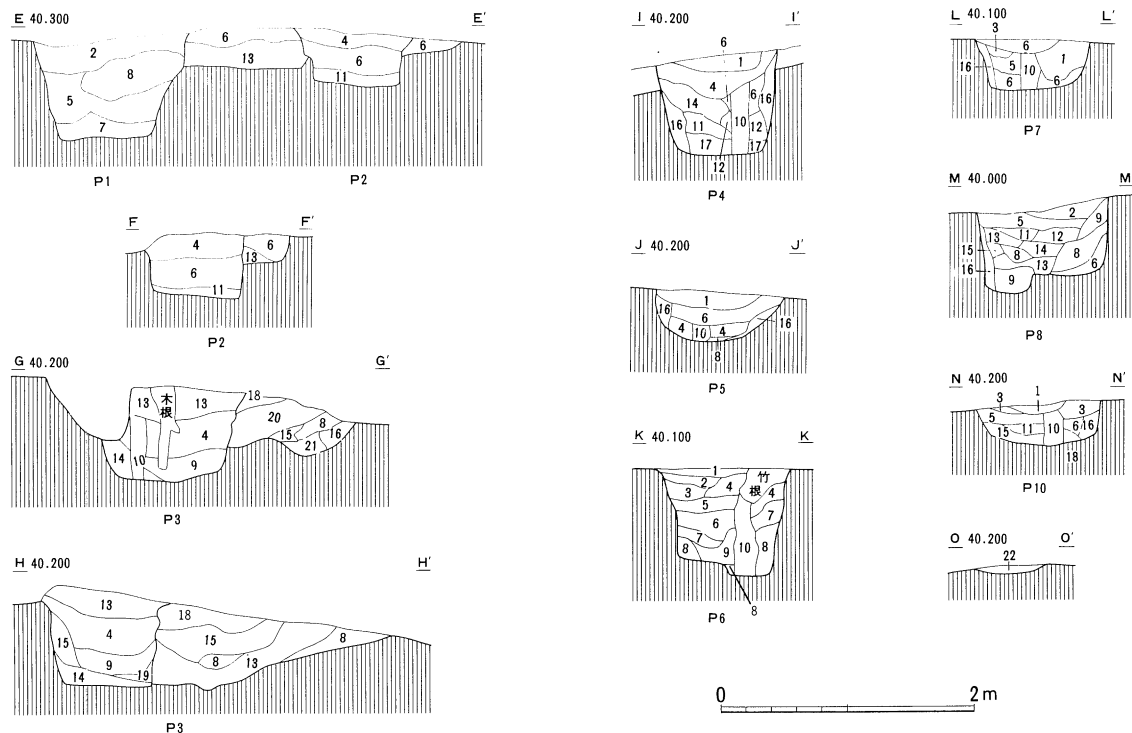
1号遺構の墳丘下に存在し、南～東側の一部を同周溝によって削平されて存在し、遺存状態は極めて不良である。本遺構底面も平坦ではなく、南側に向かった緩斜面を呈していることから、地滑り等によって覆土及び南壁の一部を流出しているものと考えられる。残存した炉及び壁等より長軸長5m前後の楕円プランを呈する遺構として捉えられ、深さは確認面からおよそ20cm前後を測る。硬化面は存在せず全体的に凹凸が激しい。炉は南側に存在し、よく焼けている。ピットは計11本検出されており、P 2・4・6・7が深さ30cm前後を測る以外はいずれも深さ10cm前後の小ピットであり、いずれが主柱穴であるのかよく分からない。



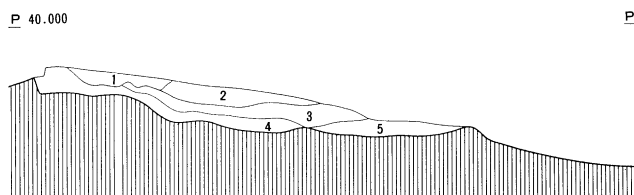
第17図 6号遺構実測図



第18図 7・8号遺構実測図



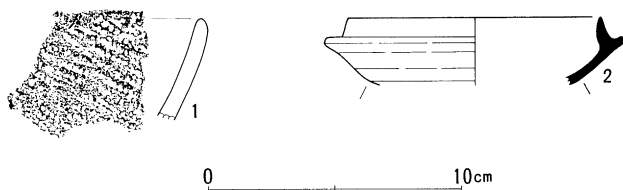
- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒多量に含む。竹根びっしりと生え地山との区別不明瞭。 | 13 暗褐色 | ローム粒、ロームBやや多く含む。締り弱い。 |
| 2 暗褐色 | 有機質土中に5cm大のロームBを少量含む。 | 14 極暗褐色 | ローム粒、ロームBを少量含むものの、極めて有機質性強い。12層より明るい。 |
| 3 褐色 | ロームB、ローム粒主体、締る。 | 15 暗褐色 | ローム粒、ロームB多量に含む。締り弱い。 |
| 4 暗褐色 | 有機質土中にローム粒霜降状に含む。 | 16 暗褐色 | よごれたローム粒多量に含む。 |
| 5 暗褐色 | ロームB、ローム粒やや多く含む。締る。 | 17 暗褐色 | ローム粒、ロームB少量含む、やや締り有機質性も強い。 |
| 6 暗褐色 | ローム粒多、ロームB少量含む。 | 18 褐色 | ローム粒多量に含む。 |
| 7 黒褐色 | 有機質土中に少量のローム粒含む。 | 19 黒褐色 | 有機質性強、ローム粒少量含む。 |
| 8 褐色 | ロームB主体。 | 20 暗褐色 | 有機質性やや弱い。ローム粒、ロームB(2cm大)少量含む、若干の炭化物散る。 |
| 9 暗褐色 | 有機質土主体やや締り欠く。 | 21 暗褐色 | ローム粒、ロームB多量に含む。少量の炭化物混入する。 |
| 10 暗褐色 | 粒子粗い有機質土中に2mm大のローム粒若干含む。締りなし。 | 22 赤褐色 | 焼土(炉?) |
| 11 暗褐色 | 有機質土中に若干のローム粒含む。 | | |
| 12 黒褐色 | 有機質性最も強くローム粒等ほとんど含まない。 | | |



P'

0 2m

- | | |
|-------|------------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土、焼土Bを多量に含む。炉状には良く焼けていない。 |
| 2 黒褐色 | 有機質土、ローム等ほとんど含まない。 |
| 3 暗褐色 | 有機質土中にローム粒少量含む。 |
| 4 暗褐色 | 有機質土中にローム粒やや多く含む。3層よりローム量多い。 |
| 5 暗褐色 | よごれたローム粒多量に含む。 |



第19図 7・8号遺構及び出土遺物実測図

遺物 計16点の図示可能遺物が遺構内外より検出された。これらの出土遺物の内、遺構内の遺物は、覆土中でも極めて高い位置から検出されたものであり、いずれも本遺構に直接伴うものとは考えられない。また遺構平面プランから弥生時代の竪穴住居跡と考えられ、むしろ1号遺構周溝内検出弥生土器の方が本遺構に伴う可能性の方が強い。

4 掘立柱建物跡

7号遺構

調査区域ほぼ中央、1号遺構から2号遺構に至る瘦尾根間に位置し、2号遺構周溝の一部を削平して存在する。側柱建物跡であり桁行3間(4.7m)、梁行2間(3.8m)を測る。ピット平面プランは円形を呈し、深さは確認面よりP1・88cm、P2・48cm、P3・82cm、P4・84cm、P5・38cm、P6・95cm、P7・36cm、P8・83cm、P9・36cm、P10・39cmを測り、四端が深い掘形を呈している。中央西側寄りに、炉跡かと思われるよく焼けた火床面が検出されている。

遺物 2点の図示可能遺物が遺構内外より検出された。1はP2覆土内より検出された縄文土器口縁部であり、本遺構に直接伴うものとは考えられない。2は周囲より検出された須恵器坏身であり、TK-209型式併行期の所産と考えられるが、本遺構に直接伴うかどうか不明である。

5 土坑

8号遺構

7号遺構北側に位置し、2号遺構を削平し4号遺構に削平されて存在する。確認段階で焼土の存在が認められ、当初炉穴等の遺構かと考えられた。しかし焼土が掘り方底面に達しておらず、またよく焼けた火床面が検出されなかったことから炉穴として取り扱うことができない。P～P'間3.48m、底面は凹凸を呈し、深さは確認面から20cm前後を測る。

遺物 まったく検出されなかった。

第Ⅲ章 ま と め

最後に今回の調査によって得られた成果を、2号遺構（古墳）を中心としてまとめておきたい。

2号遺構は前述したごとく、旧表土以下の調査によって明瞭な地山断層が認められ、またこの断層は墳丘自体に及んでいることが判明するに至り、墳丘構築以降に何らかの原因によって地滑りを起こしている事は明白である。（第7図・図版10参照）

また2号遺構北側周溝内の攪乱部周辺の遺物出土状況から、周囲に8世紀代の竪穴住居跡等の遺構が存在していた可能性が考えられ、更に5号遺構例も加味すると、各遺構所属年代以降における当遺構を含んだ限定的な範囲を断続的にか、或いは少なくとも9世紀後半～10世期初頭以降には確実に遺跡全域に跨がる規模で地滑り現象を起こしたことが想定されよう。

それでは如何なる原因が地滑り現象と関連するのであろうか。一般的には地震や長雨等による地滑りが最も連想しやすいのではないだろうか。地震・長雨に関する文献として、元慶二年（878年）、9月29日の項に関東諸国に於いて発生した地震によって、相模国分僧寺・尼寺が破壊されたという記録が残存していることが興味深い。^(註1)即ち9世紀後半段階に発生した地震は、上総における当遺跡をも巻き込む比較的大規模な地震であった可能性も考えられよう。またこの相模地震が比較的関連の薄かったもののだとしても、遺跡の立地する瘦尾根は、長雨等によっても容易に地滑りを起し得る地形であることを想像することは難しくない。ともあれここでは特に2号遺構が墳丘構築以降に何らかの原因によって地滑りを起こしている事を第一の問題としたい。

ここで第7・9図を参照して頂きたい。当初主体部平面プランとして捉えた仮称中央主体部の、少なくとも刀子形石製模造品が検出された範囲より西側の墳丘は、墳丘断面の観察等によって既に流出してしまったものと捉えることができる。なぜなら墳頂部直下の旧表土上面からは当墳丘に伴う状況で鉄製曲刃鎌が検出され、この曲刃鎌出土地点を境とした南西範囲では旧表土が階段状を呈し一段下がった状況で検出されている。また旧表土以下の断面観察をすることによって、少なくともこの断層が地山白灰色粘土層まで達していることが判明し、さらに墳丘盛土以下全面に及ぶ旧表土の完全除去により、4箇所の断層範囲が検出されていることから明白である。したがって当初主体部平面プランとして捉えた仮称中央主体部の位置と範囲は明らかに無理があり、刀子形石製模造品・曲刃鎌及び周溝内より検出された古墳時代中期土器群とほぼ同一時期に比定できる墳丘内出土遺物である赤彩土師器や鉄鏃の検出から、第9図破線で示した範囲付近に本来の内部施設が存在したものと推定されるに至った。なぜなら本来の内部施設が破線範囲付近に存在しなければ、破線範囲下層に存在する竹根ないしは竹の子採取坑等による墳丘内攪乱坑内より鉄鏃が検出されるということがありえないからである。

さてここで第二の問題となるのが複数内部施設存在の可能性と検出遺物の問題である。つまり検出遺物の多くに明らかな年代差が存在するのであれば、本来の内部施設の存在を破線範囲付近以外にも想定する必要に迫られることもあり、ここでは本墳より検出された土師器・須恵器・曲刃鎌・鉄鏃・刀子形石製模造品について検討を加えてみたい。（第10・11図）

土師器 第10図3-A～9は、周溝内及び墳頂部より検出され、何れも南関東における和泉式土器

として捉えられるものである。これを茶ノ木編年に当てはめれば和泉Ⅲ式期頃の範疇に比定できよう。^(註2)

須恵器 何れも北側の墳丘裾から斜面にかけて検出されている。1は口唇部下外面凹帯に弱い釉溜が、凸帯間には列点文及び櫛描波状文が認められる。列点文は図示状態で下から上へと施文されていることや釉溜から器台脚部の可能性も考えたが、8世紀代の遺物と混在した状況で検出されていることや、凸帯部の上下に沈線を施し相対的に凸帯を強調させる手法ながら既に凸帯が形骸化した製品であり本遺構に直接伴うものとは考えにくい。2は陶邑報告Ⅲのなかでは、TK-305号窯出土中型甕D2類の範疇として捉えることができる製品であり、一部中村編年第Ⅰ型式終末頃まで残存するもののその主体は第Ⅰ型式2ないし3段階に盛行する器種である。幾分頸部傾きが足らず時期がやや下る可能性もあるが、安定感が悪く頸部端があと少し内側に入り込む余地がある。また口唇部下の凸帯が丸く鈍い感を与える第Ⅰ型式2段階の特徴が認められ、3段階に存在する凸帯の上下に沈線を施し相対的に強調させる手法ではないことから、中村編年第Ⅰ型式Ⅰ-2段階併行期に比定することができよう。^(註3)

曲刃鎌 墳丘中央部旧表土上面より検出されており、その出土状況から盛土開始直前に現位置に据え置かれたものとして捉えることができる。一般的に鎌は直刃から曲刃へと移行するものとして捉えられており、両者の移行段階に存在した古墳として野中アリ山古墳が、移行終了段階以降の古墳として河内野中古墳の存在が著名である。また河内野中古墳墳頂部からはTK-73~216型式期に比定できるという器台破片を多量に検出しており、^(註4)^(註5)^(註6) 時期的にも本墳との類似性を示している。^(註7)

鉄鏃 墳丘内攪乱坑内より16・18・19が、東側周溝端部の比較的高い位置で17が検出されている。このような攪乱坑内や墳丘から離れた状況で検出された起因として、少なくともこの墳丘内攪乱坑真上ないしは近辺に存在した内部施設に伴う鉄鏃が、近年における竹の子採取等によって生じた攪乱坑内に落下、或いは排土に混入して散在してしまったものと捉えることができる。16は、検出時に一個体と思われるほど非常に接近した位置で出土しながら、一括して取り上げられてしまったものである。頸部を欠損するが復元全長12cm前後の三角形式の長頸鏃として捉えることができる。鏃身部は撫関で平造に近い両丸造、篋被関部は角関を呈している。茎部は関部付近が方形、次第に円形へと幅を減じながら推移し端部は丸い。17は先端のふくらが強く、刃部鑄なし両丸造の柳葉式かと思われる鏃身部であるが大半を欠く。18は長頸鏃篋被端部であるが、鏃膨れがひどく関部形状は不明瞭である。19はおそらく長頸式の片刃鏃であるが、大半を欠き詳細不明である。これらの鉄鏃群は必ずしも良好資料とは言いがたいものの、杉山編年第五様式の範疇に属するものと考えられよう。^(註8)

石製模造品 墳頂部のかなり高い位置から滑石製刀子形1点のみが検出された。鞘部の1/2程を欠損するが、鞘口の方形突出部に貫通孔を持ち、縫合せの糸穴を比較的忠実に表現した製品として捉えることができる。把頭が把元より細い先細りの形態を呈し、把頭の刃側角に挟りが入っている。これらのことから杉山編年第Ⅲ期の範疇に属するものと考えられよう。また石製模造品曲刃鎌との供伴は認められないものの、^(註9) 墳丘中央部旧表土上面より検出された鉄製曲刃鎌との関係から間接的に白石編年第3期に対応するものと捉えることができる。^(註10)

以上本墳より検出された土師器・須恵器・曲刃鎌・鉄鏃・刀子形石製模造品の検討を通じ、時期的には古墳時代中期の中でも極めて限定された一時期を本墳の築造期に比定できると同時に、限られた検出遺物の中では複数内部施設の存在を肯定できるような資料に恵まれなかった。したがって本墳の内部施設は、第9図破線で示す範囲周辺に単独で存在したものと推定することができよう。

また出土遺物のセット関係から、少なくとも本墳を河内野中古墳と非常に接近した時期の墳墓に比定することが可能であろう。

問題点 ここでは本墳の年代観を含めた問題提示をしておきたい。本墳より検出された土師器・須恵器・曲刃鎌・鉄鏃・刀子形石製模造品は、古墳時代中期の中でも極めて限定された時期に比定できることは前述してきた通りである。ところがこれら検出遺物の最も大きな年代観の鍵を握る須恵器の出現期に関しては、4世紀末ないしは5世紀初頭まで遡るとする白石説に代表される早期出現説と、^(註11)その出現は早くとも5世紀中葉以降であるとする田辺説に代表される5世紀中葉出現説、^(註12)両者の中間的な立場をとる柳本氏に代表される5世紀中葉に近い前半代出現説が存在しており、^(註13)何れの説を採用するかによって須恵器と供伴する各種遺物の時期決定も流動的な状況下にあるといえよう。また現状においては須恵器の出現を5世紀のいつの時点に想定するかによって、これと連動する供伴布留式土器後半段階の出現と終焉の年代観と、少なくとも大別布留Ⅰ～Ⅲ式期における各期に対して、その変遷年代幅をどのように解釈するのかといった問題点が常につきまとうのである。^(註14)またこれとは別の視点、即ち我国須恵器の源流とも言える陶質土器・韓式系土器の観点から、その故地は朝鮮半島南部、慶尚南道西部地域を中心として金海・釜山・或いは全羅道との関わりが指摘されていること等も十分な留意が必要であろう。^(註15)

ここで筆者は、初めて倭王が、倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王と称し、上表して除正されるよう求めた文献的信憑性の高い宋書倭国伝における記載を重視しておきたい。^(註16)即ち倭王珍が上表した438年には、少なくとも我国須恵器の源流とされる陶質土器・韓式系土器の故地とされる慶尚南道西部地域を中心とする地域や、金海・釜山・或いは全羅道に分布する陶質土器との接点として、文献上度々登場する任那をはじめとし、この頃秦韓12国・慕韓50余国のうち百済・新羅の統一から漏れた一部が残存していた可能性との関わりを含めて考えなければならない問題、換言すれば倭王珍がこれらの地域を含み得る範囲で、その軍事権ないしは駐屯権を主張する背後に存在した政治的駆け引きと深く関連する我国須恵器の出現問題として捉えることができるからである。そして倭王珍の上表以前の段階に、既にこれらの地域が倭国と極めて近い関係であったと推定することは、先の陶質土器との関係からもさほど難しいことではないであろう。

このように捉えると我国須恵器の出現期は、自説における5世紀中葉に近い前半代、即ちTK-73型式期を少なくとも530年代に想定することは可能であろう。しかしながら、これとて須恵器と供伴する土師器を布留式土器併行関係の中でどの位置に比定するか解釈によって流動的な状況なのであり、三角縁神獣鏡と卑弥呼との関係関連を含めた巨視的な解釈を庄内・布留式土器との併行関係の中で捉えることすら、各期におけるその土器様式の変遷年代幅を単純に均一と捉えられるかどうかの問題を含めて、いまだ流動的な段階と言わねばならない。

註及び引用参考文献

- (1) 左大臣從二位藤原朝臣時平「日本三代実録第三十四」『新訂増補国史大系日本三代実録後編』1983 吉川弘文館
またこの月は特に雨が多く、秋の収穫にも影響があったことが記されている。
- (2) 木對和紀「竅穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉——椎津茶ノ木遺跡を中心として——」
『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』1993財団法人市原市文化財センター
筆者はこの論考の中で、須恵器出現の実年代を5世紀中葉に近い前半代と見做している。また現在、須恵器と土師器の併行関係を再検討中であり、改めて布留Ⅱ式後半段階併行期は南関東地域における五領式土器から和泉式土器への変遷過渡期として捉え、併せて布留Ⅱ式併行期を布留Ⅱ式後半段階併行期に、五領Ⅱ式期はほぼ布留Ⅱ式前半段階併行期以前と改正することが最も現状に近い状況かとも思われる。このことについては近日中に別稿を予定し、改めて述べることにしたい。
- (3) 中村 浩他『陶邑Ⅲ』1978 大阪府教育委員会
- (4) 都出比呂志「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』1989岩波書店
同氏はこの中で、第三の画期とする古墳時代中期中葉におけるU字形刃先と曲刃鎌をセットとする新しい農具の出現には、須恵器・武器・武具・馬具などの製作技術とともに、朝鮮半島からの体系的な技術導入の一環として捉えている。
- (5) 北野耕平他「野中アリ山古墳」『河内における古墳の調査』1964 大阪大学文学部国史研究室研究報告第一冊
- (6) 北野耕平『河内野中古墳の研究』1976 大阪大学文学部国史研究室研究報告第二冊
同氏は同書の中で、野中古墳内部施設出土の小型土器群と朝鮮半島南部から出土した類似製品との比較検討を行なった結果、野中古墳内部施設出土の小型土器群については、おそらく朝鮮半島洛東江流域から舶載された製品と捉えられている。また墳頂部より検出された器台を中心とする須恵質土器については、陶質土器の導入あるいは我国における須恵器の生産開始期問題と絡めながら、その生産地については断定を保留し、我国における須恵器の生産開始期は、五世紀前半であっても中葉から余り遡らない時期に推測し、併せて野中古墳の年代自体を五世紀中葉に近い後半代に比定している。
- (7) 木下 亘「古墳出土の初期須恵器をめぐって ——畿内及びその周辺地域の資料を中心として——」『原始古代社会研究』1984 校倉書房
柳本照男「土師器・須恵器」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品』1991 雄山閣
- (8) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集Ⅷ』1988 吉川弘文館
同氏は同書の中で、第五様式の定義について典型的な長頸鏃出現期に対応し、初期須恵器の導入や曲刃鎌への完全な移行などが認められるⅥ期及びⅦ期に対応する様式とし、南九州地方の地域様式である第四様式を除いた第三様式から第五様式移行期に属する古墳として野中古墳を充てている。また第三様式に属する古墳のひとつに野中アリ山古墳を比定し時期的にはⅤ期に対応するとしている。
このように鉄鏃の型式変遷からみても、野中アリ山古墳から野中古墳へと変遷するものとして捉えられている。また同氏は古墳諸要素の総合的な把握によるものではないと断り書きをしながら、その鉄鏃を中心とした時期区分におけるⅤ期は、概ねTK-73型式期以前、同Ⅵ期は概ねTK-73型式期、同Ⅶ期前半はTK-216型式期、後半はTK-208型式期として捉えられている様である。
これに前掲註2における私見や註6・7の見解を加味して考えると、第三様式から第五様式移行期に属する野中古墳はTK-73型式期から少なくともTK-216型式期古段階（中村編年Ⅰ-2段階）併行期、つまり須恵器が多分に型の定まらない段階に比定することができよう。
- (9) 杉山普作「石製刀子とその使途」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』1985 国立歴史民俗博物館
- (10) 白石太郎「神まつりと古墳の祭祀——古墳出土の石製模造品を中心として——」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』1985 国立歴史民俗博物館
この他石製模造品に関しては以下の文献等を参考とした。
a 木下 亘「石製模造品」『古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品』1991 雄山閣
b 森 浩一他「堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の研究」『古代学叢刊第1冊』1953 古代学研究会
c 沼沢 豊他「石神2号墳の諸問題」『千葉市東寺山石神遺跡』1977 財団法人千葉県文化財センター
尚文献cの中で沼沢氏は、刀子形石製模造品はカトンボ山古墳で36種、白石稲荷山古墳東柳で10種、西柳で12種、野毛大塚古墳では14種に分類されたほどの複雑な形態のものからシンプルなものまでの各種が、同一古墳に副葬されている事実からこれほど年代観のあてにならない遺物もあるまいとしている。また墳丘下より検出された7号住居跡の土器セットは、器

種の制限から必ずしも良好資料とは言えないものの、これを茶ノ木編年に当てはめれば概ね和泉Ⅲ式期でも前半代に比定することができよう。

- (11) a 白石太一郎「畿内における古墳の年代」『考古学ジャーナル164』1979 ニューサイエンス社

b 白石太一郎「年代決定論(二)——弥生時代以降の年代決定——」『岩波講座日本考古学1』1985 岩波書店

その後、白石氏は同書bによって自説を補強すると同時に、須恵器の出現を5世紀初頭ないしは4世紀末葉まで遡るものとした。

- (12) 田辺昭三『須恵器大成』1980 角川書店

- (13) a 柳本照男「出土遺物からみた大塚古墳の相対的年代」『摂津豊中大塚古墳』1987 豊中市教育委員会

b 柳本照男「土師器・須恵器」『古墳時代の研究8古墳Ⅱ 副葬品』1991 雄山閣

- (14) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌60-2』1974 日本考古学会

石野博信・関川尚功『纏向』1976 榎原考古学研究所

白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田 尚「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告第3集』1983 国立歴史民俗博物館

河上邦彦「古墳の編年を総括する——大和——」『季刊考古学10』1985 雄山閣

寺沢 薫『矢部遺跡』1986 榎原考古学研究所

関川尚功「土器からよむ古墳社会——古墳時代の土器の編年——」『季刊考古学24』1988 雄山閣

木下 亘・関川尚功・竹田政敬「奈良県」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』1989 第25回埋蔵文化財研究集会実行委員会

関川尚功「奈良」『古墳時代の研究10地域の古墳Ⅰ 西日本』1990 雄山閣

板野和信「和泉式土器の成立過程とその背景——和泉式後期土器との編年の検討——」『埼玉考古学論集』1991 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

米田敏幸「土師器の編年Ⅰ近畿」『古墳時代の研究6土師器と須恵器』1991雄山閣

このように典型的な前方後円墳の出現や庄内・布留式土器の出現と終焉、陶質土器及び初期須恵器の出現やこれらと併行関係が考えられる在地産の土師器問題を抱えた論文は、上記の他にも枚挙に暇がないほど存在し、これに三角縁神獣銭の問題や短甲・鉄鏃等の武具・武器類、或いは埴輪の変遷等と絡めこれらの問題をより複雑なものとしている。ただしここで重要なことは、箸墓＝布留式土器としてもその出現に関わる実年代がいつごろに比定できるのかということであろう。なぜならこのことによって布留式土器の変遷年代幅が大幅に連動するからである。つまり布留式土器の出現を比較的古い段階に比定すれば、その変遷年代幅を長く、比較的新しい段階に比定すれば、その変遷年代幅を短く想定しなければならないからである。尚このことに関して寺沢氏は、矢部遺跡の報告の中で須恵器一型式に関わる変遷年代幅をおよそ20年とし、TK-73型式の開始実年代を5世紀第1四半期でも早い時期に比定し、布留3式をおよそ4世紀の第3四半期に、布留0式を西暦300年前後に相当させ、布留式土器一様式における変遷年代幅を20～25年として捉えることが可能とされている。しかしこれには大きな矛盾が含まれている。なぜなら同氏の提唱する布留4式新段階の標識資料中には、少なくとも中村編年Ⅰ-1段階からⅠ-4段階に相当する須恵器が含まれており、須恵器一型式に関わる変遷年代幅がおよそ20年とするならば、土師器を含めたそのセット関係には明らかに混入品が含まれていると判断しなければならないからである。またこの段階における須恵器の主体が中村編年Ⅰ-1段階からⅠ-2段階に相当するとして捉えたとしても、布留式土器一様式における変遷年代幅20～25年の中に、須恵器二型式に関わる変遷年代幅およそ40年が存在しており、少なくともTK-73型式期(中村編年Ⅰ-1段階)の開始期を布留4式古段階まで繰り上げなければならないことは明らかである。しかし同氏の標識資料中、中村編年Ⅰ-1段階からⅠ-2段階に相当する須恵器は布留4式新段階に集中し、布留4式古段階にはまったく存在していない。にもかかわらず同氏における須恵器の出現期はどう考えても布留4式古段階なのである。ところで須恵器の出現期は本当に布留4式古段階で、その変遷年代幅は20年なのであるか。同氏によれば布留4式古段階に相当する標識遺構は、上ノ井手SE-30上層・発志院SD-50中層・八尾南SE-21等が相当すると目されており、このうち上ノ井手SE-30上層は柳本氏によって布留Ⅲ-b、八尾南SE-21は板野氏によってⅡ-2、米田氏によって布留Ⅳ段階に比定されている。ところが米田・板野氏によって同一段階とされるⅡ-2・布留Ⅳ段階における他の共通標識遺構である平城京朝集殿下層、SD-6030上層資料中には、それぞれTK-73～216古段階に比定できる須恵器2点が検出されており、ここでもまた中村編年Ⅰ-1段階からⅠ-2段階に相当する須恵器が認められるのである。このことは次様式である米田氏のⅤ・板野氏のⅢ・寺沢氏

の布留4式新段階中における共通標識遺構、平城京下層S D-881資料中にT K-216新段階ないしはO N-46型式期に比定することができる須恵器坏蓋2点が検出されていることから益々不可解な現象となって現われてくるのである。このことは単なる須恵器だけの重複問題ではなく土師器の併行関係、つまりこの段階における須恵器一型式と土師器一様式に関わる変遷年代幅をそれぞれ単純に20年～25年と捉えることができないのと同時に、土師器・須恵器とのセット関係の再考と須恵器の出現期の問題を改めて考えねばならない段階であることを痛感するのである。

筆者は、所謂布留4式古段階期に須恵器が出現するのではなく、その出現はさらに遡るものと考えているが、その実年代については前掲註2の論考から5世紀中葉に近い前半代と見做している。また寺沢氏の布留2後半・柳本氏の布留II-b・米田氏の布留III段階における共通標識遺構である藤原京内裏外郭S D-912資料は、同じく寺沢氏の布留2後半・柳本氏の布留II-a・米田氏の布留II段階における共通標識遺構である上ノ井手S D-031資料と比較した場合、安達・木下氏が指摘するように整形・調整技法の粗雑化が認められることや、米田氏の布留III段階には船橋O-1が併行関係にあるものとして捉えられていることは重要であろう。すなわち船橋O-1は安達・木下氏が指摘するように、すでに須恵器を伴する要素が強いとされており、翻って考えればこの段階における小型精製土器3種の崩壊傾向と土師器における整形・調整技法の粗雑化の傾向は、祭祀的要素が強いとされる小型精製土器3種の存在意義が暫時的に須恵器に取って代られた現象、換言すればこの段階初めて量産体制が可能となった須恵器が、墳墓・集落等に散見しはじめる一定期間の状況が土師器の様式に反映された結果と想定することができ、この段階を以てT K-73型式期に比定することが可能であろう。このことは前述してきた米田・板野氏によって同一段階とされるII-2・布留IV段階における共通標識遺構である平城京朝集殿下層、S D-6030上層資料中には、T K-73～216古段階に比定できる須恵器2点が検出されており、現状では混入土器セットの可能性があったとしても、この段階をT K-216古段階期に想定することは可能であろう。したがって大庭寺遺跡等に代表される我国最古須恵器の生産開始期は、少なくとも寺沢氏の布留2後半・柳本氏の布留II-a・米田氏の布留II段階における共通標識遺構である上ノ井手S D-031資料期の終末段階頃まで遡る可能性がある。

尚、筆者は布留式土器をI・II・IIIの三段階に大別した場合、所謂布留II式期は長期に及ぶ安定期として捉えており、その変遷年代幅は布留式土器中最も長期に及ぶものと捉えている。その好例として東大寺山古墳における石製埴・器台の存在は、このことを如実に物語っているといえよう。

- (15) 酒井清治「古墳時代の日本と中国・朝鮮——陶質土器と初期須恵器——」『季刊考古学33』1990 雄山閣

定森秀夫「古墳時代の日本と中国・朝鮮——日本陶質土器の原郷——」『季刊考古学33』1990 雄山閣

- (16) 笠井倭人『倭の五王』1973 吉川弘文館

金 両基他『図説韓国の歴史』1988 河出書房新社

倭王珍が自称した肩書に含まれている国名には、五世紀には実在しないとされる秦韓・慕韓の存在や、すでに慕韓50余国の統一を終え、宋との冊封関係下にあった百済、秦韓12国を統一した新羅が含まれている。このことに関する見解として、一説には支配する国の数を多くして権威を高めたものといい、また一説には秦韓・慕韓とも統一に漏れて残ったものが存在したのだらうといい、或説では、倭王の系譜は朝鮮半島南部の辰王に連なるものであり、故地に対する潜在主権を主張したものというが、未だその結論として解明された訳ではない。しかしながら、427年高句麗長寿王による平壤への遷都が敢行されたことが事実なら、この時期朝鮮半島に一斉に緊張感が走ったことは十分想定される出来事であり、またこの時期ないしはこれ以前における記紀・三国史記・広開土王碑等に示す内容が、あながち無関係なわけではないものとするれば、この段階における倭・高句麗・新羅・百済の政治的関係を無視して論ずる訳にはいかないであろう。したがって高句麗の南下政策によって直接的に脅威を受けた百済が、倭に対して援軍を求め、その見返りとして倭が百済領内に駐屯地等を得た事は十分想定されることであろう。また新羅に関しては、この段階独自に宋との冊封関係を有しておらず、高句麗の影響下にあったことが想定されるが、それでも433年には高句麗の外圧を排除するため百済との同盟関係が成立したとされており、ここに倭を加えた対高句麗政策が実現したものと推定される。とすればこの時新羅領内においても倭が軍事権ないしは駐屯地を得た事は十分想定されることであり、ここに倭王珍が称した肩書きの背景を想定することは可能であろう。

第2表 出土土器一覽表

遺構 No.	旧遺構 No.	図番	実測 No.	器 種	出土位置	法 量 (推定) cm		焼 成	(外)色調 (内)	胎 土	(外) (内) 特 徴	備 考
1号	1号	1	9	坏 口縁 $\frac{1}{2}$	周溝覆土 下層	口径	底径	—	—	密	ヘラケズリ ヘラミガキ	内外面 (黒色処理)
		2	11	坏 口縁 $\frac{1}{2}$	周溝覆土 下層	(11.0)	—	—	(3.4)	密	ヘラケズリ ヘラナデ痕 跡残すが全体的に剝離激しく不明	
		3	5	須恵器、蓋 $\frac{1}{2}$	周溝底 直上	(12.0)	—	—	—	1～5mm大小礫 1mm大は白色粒	ロクロ、ヘラケズリ範囲方向不明	
		4	12	甕 底部 $\frac{1}{2}$ 強	墳丘内 一括	—	(6.4)	—	—	微砂粒多	フラケズリ フラナデ?	
		5	10	小型甕 底部 $\frac{1}{2}$ 弱	周溝覆土 下層	—	(6.0)	—	—	密	フラケズリ 底部ヘラケズリ ヘラケズリに近いヘラナデ 一部ヘラミガキ	
		6	6	深鉢 底部 $\frac{1}{2}$	周溝覆土 上層	—	(14.2)	—	—	1mm大小礫多		6号遺構覆土内と接合
		7	8	小型甕 口縁 $\frac{1}{2}$	墳丘内 一括	(11.2)	—	—	—	砂粒多	内外面剝離激しい	
		8	14-1	壺 口縁	周溝覆土 下層	(12.8)	—	—	—	砂粒多	口唇部細縄文、口唇部下縄文原体による圧痕文、頸部 羽状細縄文 内外面磨耗激しい	内面 (赤彩) 痕あり 拓本 9、10と同一個体
		9	14-2	壺 口縁	周溝覆土 下層	—	—	—	—	砂粒多	口唇部細縄文、口唇部下縄文原体による圧痕文、頸部 羽状細縄文 内外面磨耗激しい	内面 (赤彩) 痕あり 拓本 8、10と同一個体
		10	14-3	壺 口縁	周溝覆土 下層	—	—	—	—	砂粒多	口唇部細縄文、口唇部下縄文原体による圧痕文、頸部 羽状細縄文 内外面磨耗激しい	内面 (赤彩) 痕あり 拓本 8、9と同一個体
		11	13	甕 頸部	墳丘内	—	—	—	—	砂粒多	4段以上の輪積痕	拓本 弥生 (6号遺構覆土内)
		12	22	深鉢 胴部	周溝内 一括	—	—	—	—	繊維含む		拓本 茅山
		13	23	深鉢 胴部	墳丘内 一括	—	—	—	—	繊維含む		拓本 茅山
		14	21	深鉢 胴部	周溝内 一括	—	—	—	—	繊維含む		拓本 茅山
		15	25	深鉢 口縁	墳丘内 一括	—	—	—	—	砂粒多		拓本 田戸上層

16	18	深鉢 口縁	周溝内 一括	—	—	—	普通	褐色	砂粒多	沈線内に連続刺突文	拓本 阿玉台
17	17	深鉢 胴部	周溝内 一括	—	—	—	普通	褐色	砂粒やや多		拓本 阿玉台
18	19	深鉢 胴部	墳丘内 一括	—	—	—	良好	褐色	砂粒多	平行沈線内連続刺突文	拓本 阿玉台
19	20	深鉢 胴部	墳丘内	—	—	—	良好	褐色	密		拓本 阿玉台 (6号遺構覆土内)
20	15	深鉢 胴部	周溝覆土 上層	—	—	—	良好	褐色	砂粒やや多	連続刺突文	拓本 堀ノ内II
21	24	深鉢 胴部	墳丘内 一括	—	—	—	不良	茶褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線	拓本 加曽利B?
1	49	須恵器 口縁 $\frac{1}{2}$	周溝	(34.2)	—	—	良好	灰色	密	ロクロ、口頸部に3条の突帯、最下段は断面方形、他2は断面三角形、最上段以外は沈線によって突帯を強調している。突帯間上段は櫛状工具による列点文、突帯間下段は櫛状波状文、口縁部下の窪に自然樹が溜っているもので器台脚部の可能性あり。内、回転ナデ	拓本
2	50	須恵器 口縁 $\frac{1}{4}$	周溝	(19.9)	—	—	良好	灰色	密	ロクロ、回転ナデ、口頸部に1条の断面三角形突帯1、櫛状波状文等の文様帯は施されていない。内、回転ナデ	
3-A・B	6・7	高坏 坏部 $\frac{1}{6}$ 、脚部 $\frac{1}{6}$ 、裾部 $\frac{1}{6}$	周溝	(17.6)	(12.2)	—	良好	赤褐色 褐色	密	ナデ 坏部ナデ、脚部ヘラケズリ、裾部ナデ	脚内面除き(赤彩) A・Bは接合しないが同一個体
4-A・B	8・9	高坏 坏部 $\frac{1}{4}$ 、裾部 $\frac{1}{4}$ 欠	周溝	(16.6)	(13.6)	—	良好	赤褐色 褐色	密	ナデ、裾部ヘラミガキ 坏部ナデ、脚部ヘラケズリ後棒状工具によるカキトリ、裾部ナデ	脚内面除き(赤彩) A・Bは接合しないが同一個体
5	2	高坏 坏部 $\frac{1}{3}$ 、脚部 $\frac{1}{2}$	周溝	—	—	—	良好	赤褐色 脚黒褐色	密	坏部ヘラナデ、脚部ナデ	脚内面除き(赤彩)
6	17	高坏 坏部 $\frac{1}{2}$ 残	周溝	(17.4)	—	—	良好	赤褐色	密	坏部ヘラナデ、脚部ヘラケズリ	内外面(赤彩)
7	13	甕 底部完存	墳頂部	—	6.5	—	やや不良	暗～褐色 淡赤褐色	微砂粒多 (やや砂っぽい)	ヘラケズリ、底部ヘラケズリ ヘラナデ	内外面(赤彩を施すが全体的に磨耗して薄くなる)
8	5	埴 口縁 $\frac{1}{2}$ 残	周溝	(11.6)	—	—	良好	赤褐色	密	ナデ、口縁部に弱い稜あり ナデ	内外面(赤彩)
9	1	埴 口縁 $\frac{1}{3}$	墳頂部	(14.6)	—	—	良好	褐～淡赤褐色	微砂粒多	内外面磨耗、剥離激しいが、内外面共赤彩が施される。	内外面(赤彩)
10	12	坏 $\frac{1}{3}$ 残	周溝	(13.8)	(8.4)	(3.25)	不良	褐色	茶褐色粒 やや多	ヘラケズリ(やや磨耗している) 斜行格子状暗文(磨耗やや激しいが、暗文は残る)	

11	14	鉢 口縁%~底部%	周溝	(15.4)	6.1	不良	淡茶褐色	茶褐色粒多	ヘラケズリ、底部ヘラケズリ、剝離激しく不明瞭 剝離激しく不明瞭	
12	15	甕 胴部~底部%弱	周溝	(17.4)	-	不良	暗褐色	砂粒多	口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ 口縁部ナデ、胴部ヘラナデ、剝離激しい	
13	10	台付甕 底部%欠	周溝	-	(10.0)	不良	暗茶褐色	砂粒多	指整形 剝離激しく不明	
14	11	台付甕 底部完存	周溝	-	7.8	不良	暗茶褐色	砂粒多	指整形 指整形	
15	20	須恵器甕 胴部	周溝 一括	-	-	良好	灰色	密	平行タタキ目文 青海波ナシ (ナデ) 方向下から上	拓本
25	47	深鉢 口縁	填頂部 旧表土	-	-	不良	暗茶褐色	砂粒多	口唇部刻み	拓本 田戸上層 28.29と同一個体
26	41	深鉢 口縁	填頂部 旧表土一括	-	-	不良	暗茶褐色	砂粒多	口唇部刻みあり、平行沈線	拓本 田戸上層 27と同一個体
27	25	深鉢 胴部	周溝 一括	-	-	不良	暗茶褐色	砂粒多	平行沈線による格子目文	拓本 田戸上層 26と同一個体
28	39	深鉢 胴部	周溝 一括	-	-	不良	暗茶褐色	砂粒多	平行沈線	拓本 田戸上層 25.29と同一個体
29	32	深鉢 胴部	填頂部 旧表土	-	-	不良	暗茶褐色	砂粒多	平行沈線	拓本 田戸上層 25.29と同一個体
30	35	深鉢 口縁	填頂部 盛土内一括	-	-	良好	褐色	密	口縁部下2条の沈線、頸部2段の三角形刺突文	拓本 五領ケ台 32と類似
31	27	深鉢 胴部	周溝	-	-	良好	褐色	密	刺突文	拓本 五領ケ台
32	34	深鉢 胴部	周溝 一括	-	-	良好	褐色	密	平行沈線、三角形刺突文	拓本 五領ケ台 30と類似
33	31	深鉢 口縁	周溝 一括	-	-	良好	暗褐色	密	口唇部刻み、胴部平行沈線	拓本 加曾利B 36と同一個体
34	37	深鉢 胴部	周溝 一括	-	-	良好	褐色	密	沈線	拓本 加曾利B
35	29	深鉢 胴部	周溝	-	-	良好	褐色	密	沈線	拓本 加曾利B

5	5	坏 口縁一部～底部 $\frac{1}{4}$	床直上	(13.3)	6.2	3.6	不良	暗褐色	砂粒多	ロクロ、体部下端糸切り後ヘラケズリ、磨耗激しく脆い	底部拓本
6	7	坏 口縁 $\frac{1}{8}$ ～底部完存	床直上	(13.8)	5.6	4.5	不良	茶褐色	砂粒多	ロクロ、底部静止糸切り後、手持ちヘラケズリ、全体的に磨耗激しい	
7	10	坏 $\frac{1}{2}$ 欠	床直上	13.0	6.0	3.6	不良	褐色	砂粒多	ロクロ、体部下端～底部糸切り後、手持ちヘラケズリ、磨耗激しく脆い	
8	9	坏 口縁 $\frac{1}{8}$ ～底部完存	床直上	(14.0)	5.9	3.6	不良	褐色	砂粒多	ロクロ、体部下端～底部回転ヘラケズリ、底部切りはなし不明	
9	13	坏 口縁 $\frac{1}{8}$	一括	(10.0)	—	—	不良	淡褐色	砂粒多	ロクロ	
10	11	坏 底部 $\frac{1}{2}$	床直上	—	4.9	—	不良	淡褐色	微砂粒多	ロクロ、底部静止糸切り後、周囲ヘラケズリ	
11	8	坏 底部 $\frac{1}{4}$ 欠	覆土	—	7.7	—	不良	茶褐色	砂粒多	ロクロ、底部手持ちヘラケズリ他、磨耗激しく不明	底部ヘラケズリ粗、段をなして平坦ではない
12	6	坏 底部完存	覆土	—	4.9	—	不良	褐色	砂粒多	ロクロ、底部回転糸切り？後手持ちヘラケズリか	やや歪みあり
13	19	須恵器 坏 口縁 $\frac{1}{8}$	覆土	(11.2)	—	—	良好	灰色	密	ロクロ	
14	21	須恵器 坏 口縁 $\frac{1}{8}$	覆土	(11.9)	—	—	良好	灰色	密	ロクロ	
15	18	須恵器 蓋 天井部の一部	覆土	—	—	—	良好	灰色	密	ロクロ、天井部回転ヘラケズリ、ケズリ方向逆時計廻り	
16	17	甕 底部 $\frac{1}{8}$	一括	—	9.8	—	やや不良	褐色	4 mm大 小礫含む	ヘラナデ	縄文
17	20	須恵器 大甕 胴部	覆土	—	—	—	良好	暗灰色	密 白色粒少含む	沈線間に2条の波状文	拓本
18	22	壺 胴部	覆土	—	—	—	良好	淡赤褐色	3 mm大 小礫含む	胴部に細縄文あり	拓本
1	1	深鉢 口縁	pit内	—	—	—	良好	暗褐色	密	貼り付け文、沈線文内に連続刺突文	拓本 阿玉台
2	13	深鉢 口縁	墳丘下	—	—	—	良好	暗褐色	密	半藪竹管による平行沈線、口唇部刻みナデ	拓本 加曽利B

3	15	深鉢 口縁	墳丘下	—	—	—	良好	暗褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線、口唇部刻み ナデ	拓本 加曽利 B
4	14	深鉢 胴部	墳丘下	—	—	—	不良	暗褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線 ヘラミガキ	拓本 加曽利 B
5	10	深鉢 胴部	墳丘下	—	—	—	不良	暗褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線 ナデ	拓本 加曽利 B
6	11	深鉢 胴部	墳丘下	—	—	—	不良	暗褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線 ナデ	拓本 加曽利 B
7	12	深鉢 胴部	墳丘下	—	—	—	不良	暗褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線 ナデ	拓本 加曽利 B
8	16	深鉢 胴部	覆土上層	—	—	—	良好	暗褐色	密	半裁竹管による平行沈線 ナデ	拓本 加曽利 B
9	8	深鉢 胴部	覆土上層	—	—	—	良好	暗褐色	密	半裁竹管による平行沈線	拓本 加曽利 B
10	7	深鉢 胴部	一括	—	—	—	良好	暗褐色	密	半裁竹管による平行沈線	拓本 加曽利 B
11	9	深鉢 胴部	覆土上層	—	—	—	不良	暗褐色	砂粒多	半裁竹管による平行沈線 ナデ	拓本 加曽利 B
12	5	深鉢 口縁	覆土上層	—	—	—	良好	褐色	白色微砂粒多	器厚は薄い 口唇部内面沈線状に屈曲	拓本 堀ノ内 13と同一個体
13	3	深鉢 口縁	覆土上層	—	—	—	良好	褐色	白色微砂粒多	棒状の貼り付け文	拓本 堀ノ内 12と同一個体
14	6	深鉢 口縁	一括	—	—	—	不良	暗褐色	砂粒多	口唇部下1条の沈線文	拓本 堀ノ内
15	2	深鉢 口縁	覆土上層	—	—	—	不良	褐色	砂粒多	口唇部に圧痕文あり	拓本 堀ノ内
16	4	注口土器？ 胴部	覆土上層	—	—	—	やや不良	褐色	砂粒多	貼り付け文内連続刺突文、8の字状刺突文	拓本 堀ノ内
7号	8号	鉢？ 口縁	P ₂ 一括	—	—	—	良好	褐色	密	斜縄文 ヘラナデ	拓本
	B地区	須恵器 坏	一括	10.0	—	—	良好	灰色	密	ロクロ、底部回転ヘラケズリ、逆時計廻り	外面、乳白色自然釉付着

第3表 出土玉類一覧表

遺構 No.	旧遺構 No.	図番	実測 No.	種 別 遺 存 度	出土位置	法 量 cm/g			備 考
						径	高	孔 重 量	
1号	1号	24	1	ガラス小玉	周溝底面	0.78	0.70	0.25 0.40	色調、濃紺

第4表 出土鉄器一覧表

遺構 No.	旧遺構 No.	図番	実測 No.	種 別 遺 存 度	出土位置	法 量 cm/g				備 考
						長 ざ	最大幅	最大厚	重 量	
2号	2号	16	56.57	三角形式長頸鍔 刃部～茎部、鍔被部	墳丘内 攪乱	刃部～茎部 全長4.72 刃部1.95	鍔身 1.15 頸部 0.54	鍔身0.28 頸部0.39	3.4 5.4	鍔身部は撫間で平造に近い両丸造 頸部の発達状態は不明 鍔被部は角関
						鍔被部 全長6.93、鍔被長2.95+d 茎長3.98	欠損部0.58	欠損部0.36		
		17	54	両丸造鍔なし柳葉式 か？刃部破片	周溝	現存長1.98	1.23	0.3	2.2	
		18	52	長頸鍔 鍔被部	墳丘内 攪乱	現存長3.78	鍔被0.78	鍔被0.6	2.8	鍔被関部不明瞭
		19	55	片刃鍔なし箭形式鍔 刃部破片	墳丘内 攪乱	全長1.63	0.71	0.36	1.4	(長頸式)
		20	53	釘 先端部？	周溝	現在長3.09	0.86	0.88	5.7	
		21	51	鍔 完形	墳頂部下 旧表土上面	全長13.15	身 3.28	身0.20～0.25 基部4.23	52.6	木質部はサビ化しサビブクレ状態 したがって柄の厚さそのものではない。

第5表 出土石器一覧表

遺構 No.	旧遺構 No.	図番	実測 No.	種 別 遺 存 度	出土位置	法 量 cm/g			備 考
						長 ざ	幅	厚 ざ 重 量	
1号	1号	22	3	片刃石斧	周溝内	8.2	8.0	2.8 268.0	覆土一括
		23	2	敲き石	周溝内	10.3	6.9	3.5 390.0	
2号	2号	22	48	刀子型石製模造品 先端部欠	中央主体部 棺底？	残 4.1 (2.2)	残 2.3 鞘口 2.23 把長 0.7 把頭 0.7	0.7	12.8 (滑石製) 鞘口部に幅2mm～3.5mm程の貫通孔1
						足下端 0.9			
		23	22	石皿	周溝内	残最大 11.1	10.9	2.0～6.0 635.0	
		24	21	石皿	周溝内	残最大 7.5	最大 6.7	最大 5.3 265.0	多孔質

写真図版



安須1・2号墳調査前（重機によって手前はすでに削平されている）



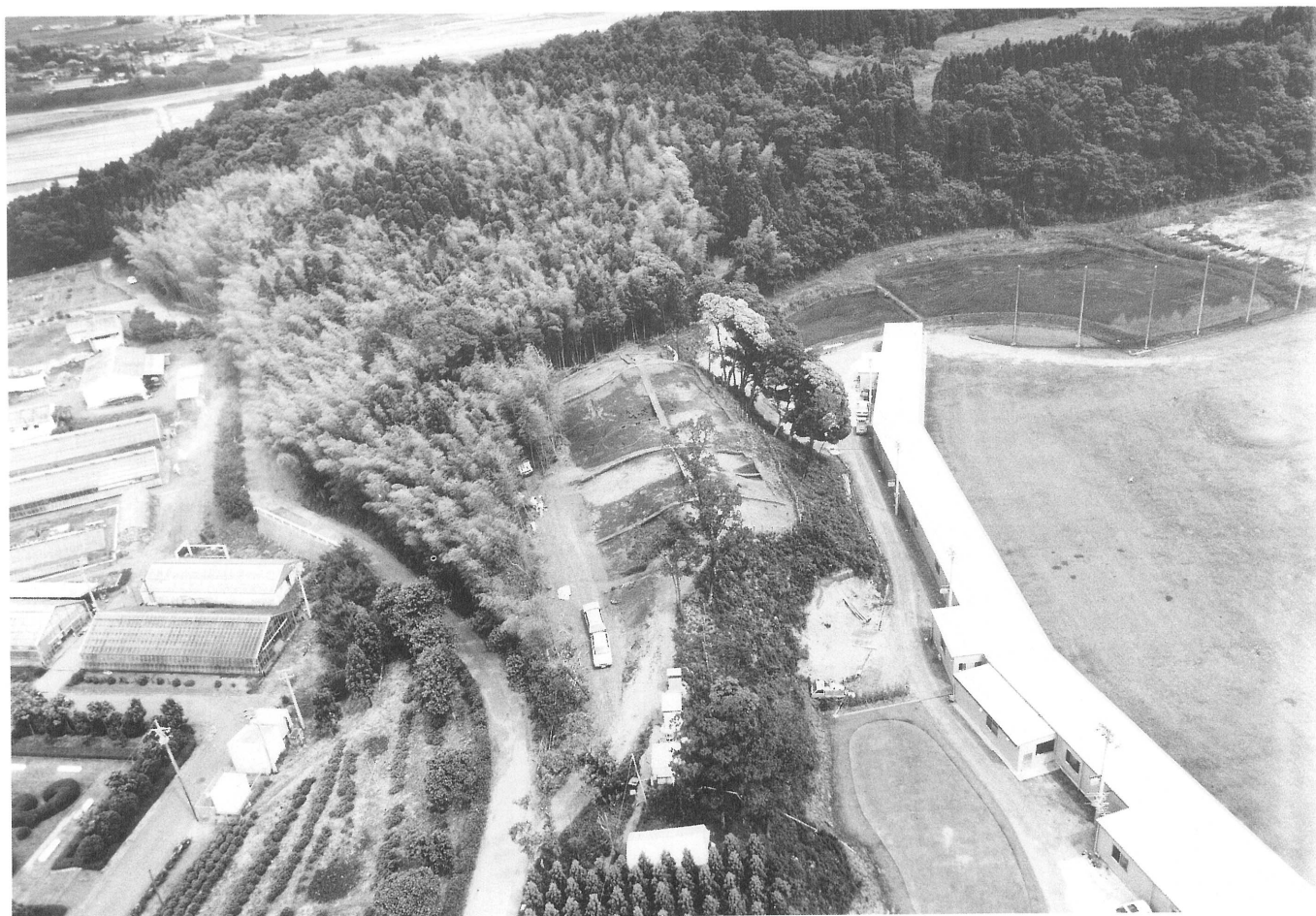
1号墳近景



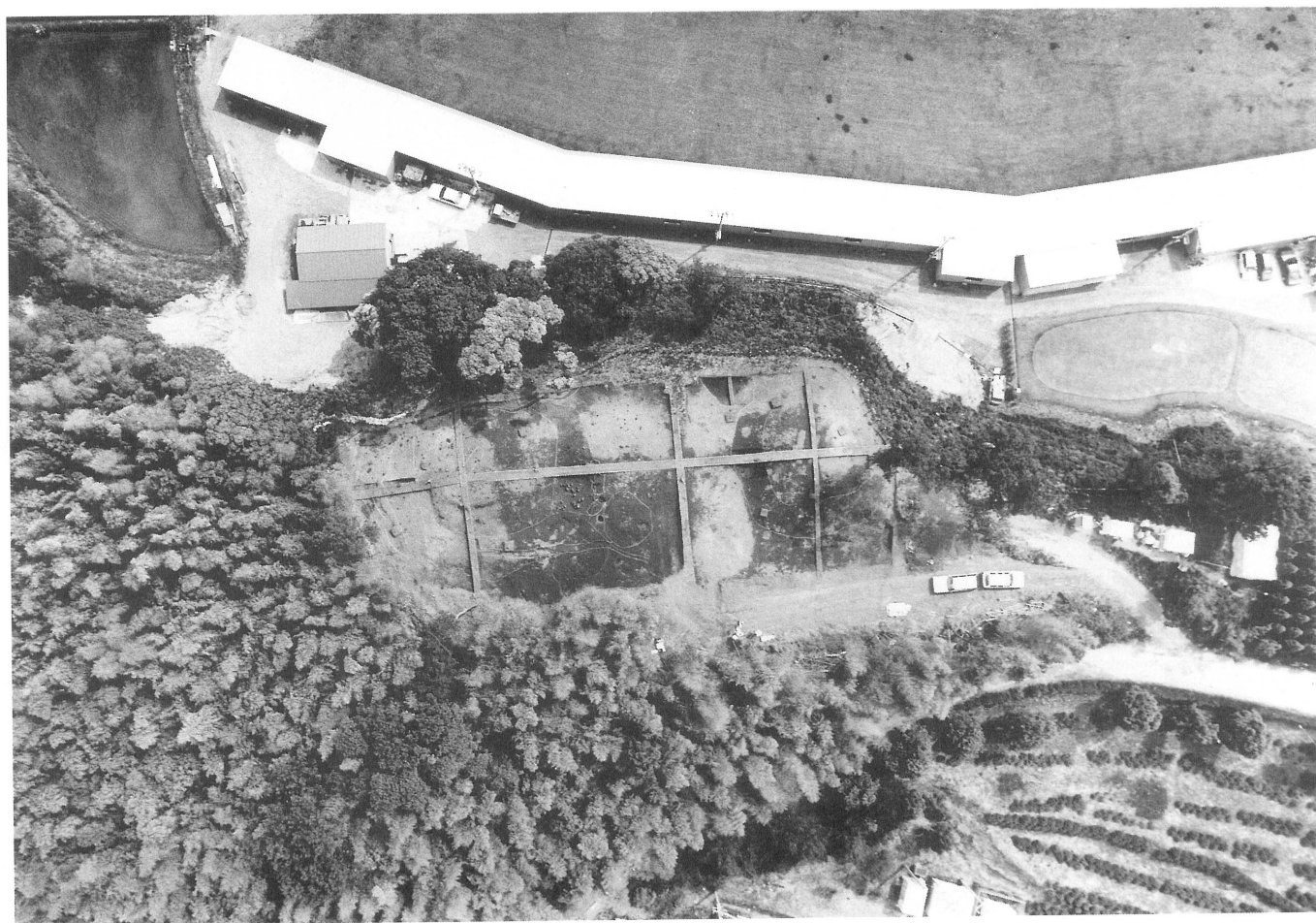
2号墳近景



安須1・2号墳(調査中)と釜神遺跡(舌状台地先端部が釜神遺跡)



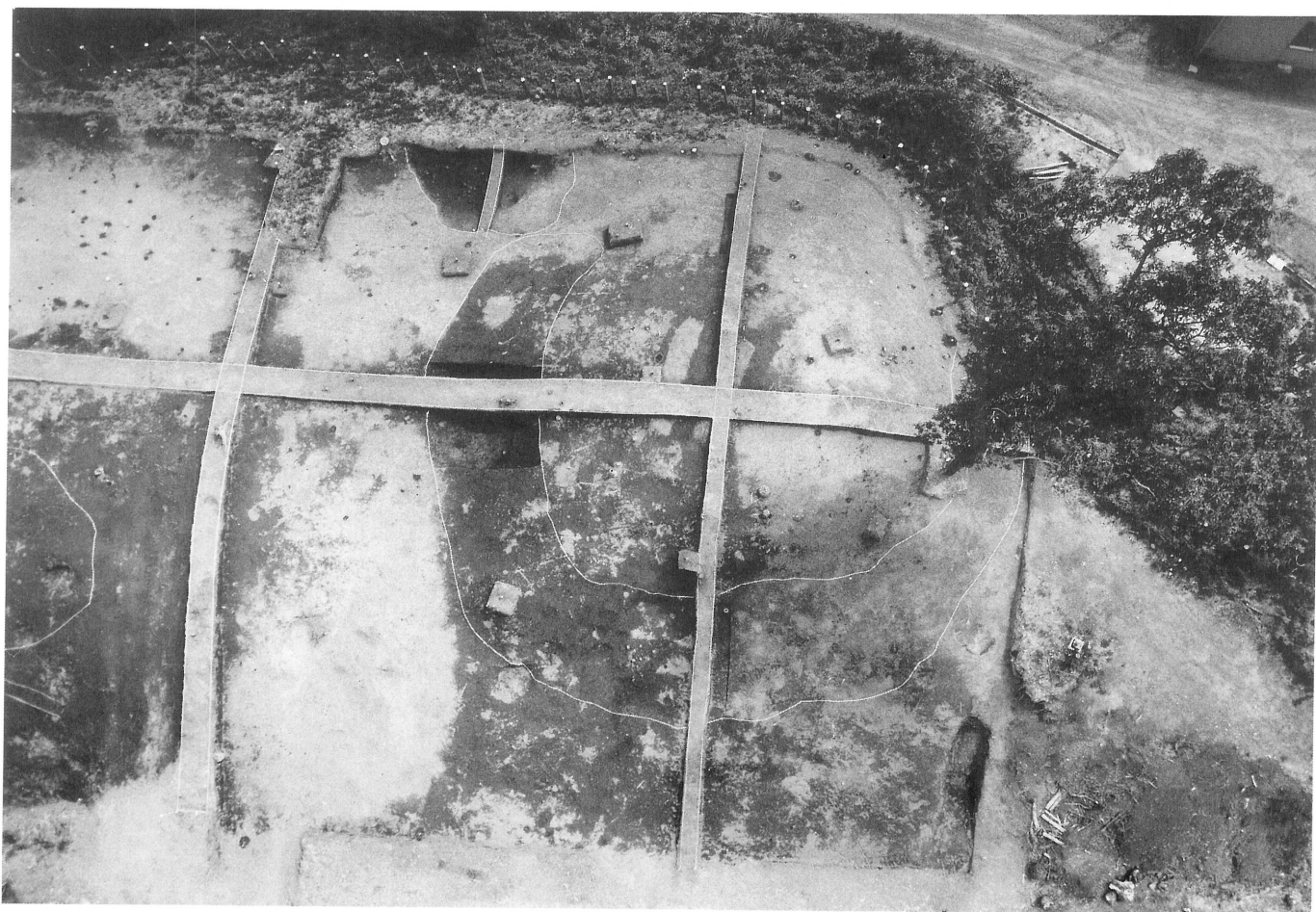
安須1・2号墳と安須別府台遺跡（2号墳後方山林に大型古墳が存在する）



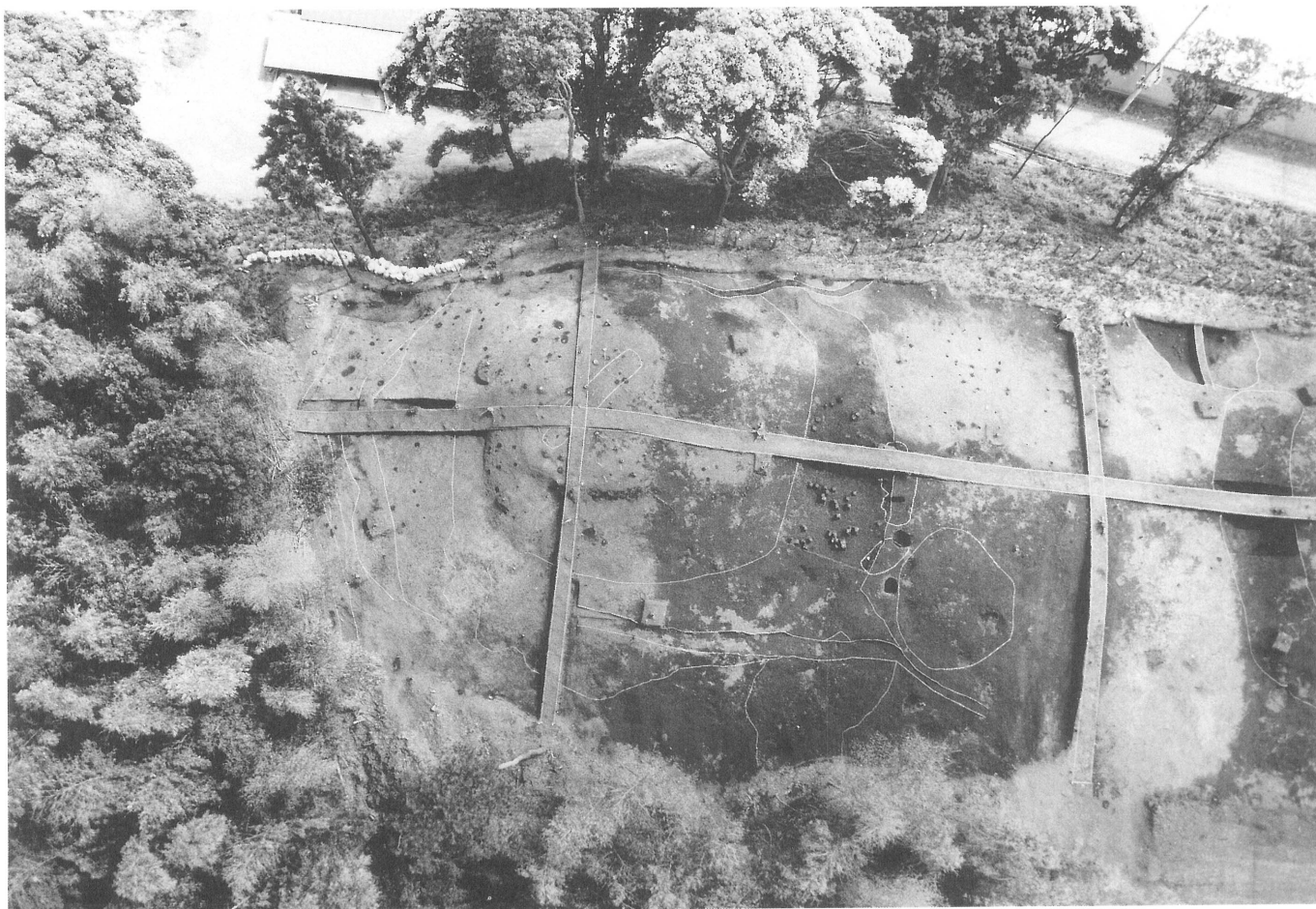
安須1・2号墳



1・2号墳



1号墳周溝検出状況（墳頂部主体部状のものは攪乱）



2号墳周溝検出状況



1・2号墳周溝完掘状況



1号墳



東側より



東側周溝土層断面



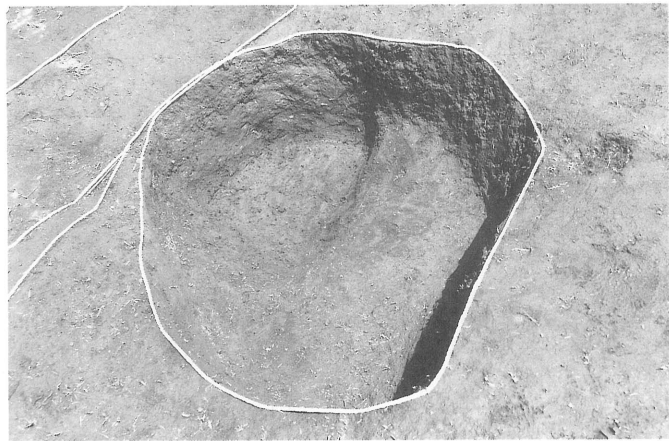
東側周溝内遺物検出状況



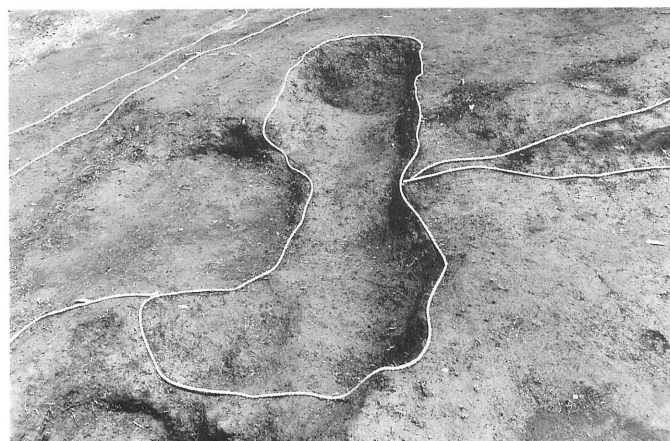
ガラス小玉検出状況



1号周溝内土壌 1



1号周溝内土壌 2



1号周溝内土壌 3



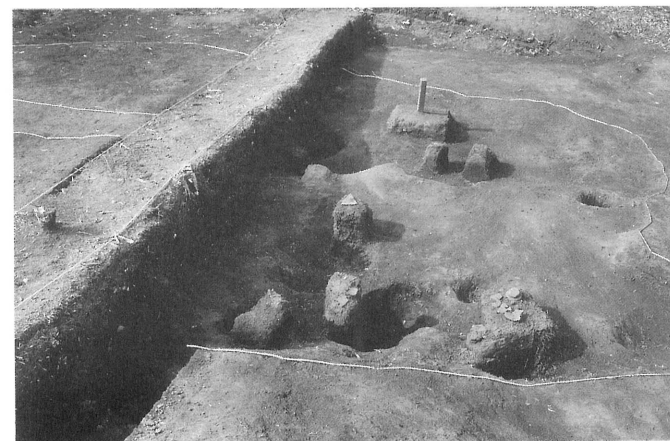
2号墳西側周溝遺物出土状況 1



2号墳西側周溝遺物出土状況 2



2号墳西側周溝遺物出土状況 3



2号墳北側周溝遺物出土状況 1



2号墳北側周溝遺物出土状況 2



2号墳周辺



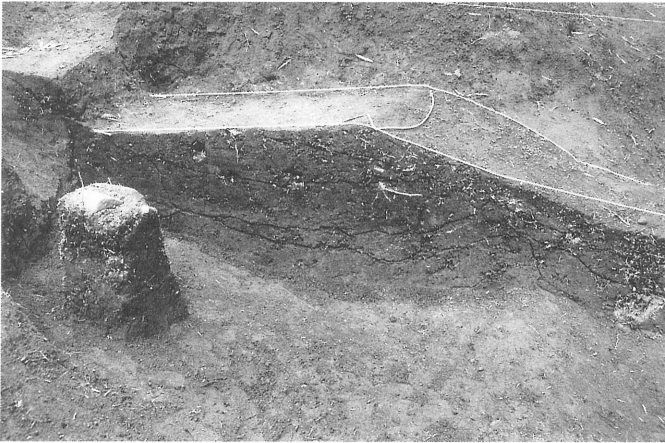
2号墳（西側より）



2号墳土層断面と断層



旧表土上面検出曲刃鎌 (断層によって旧表土が落下している)



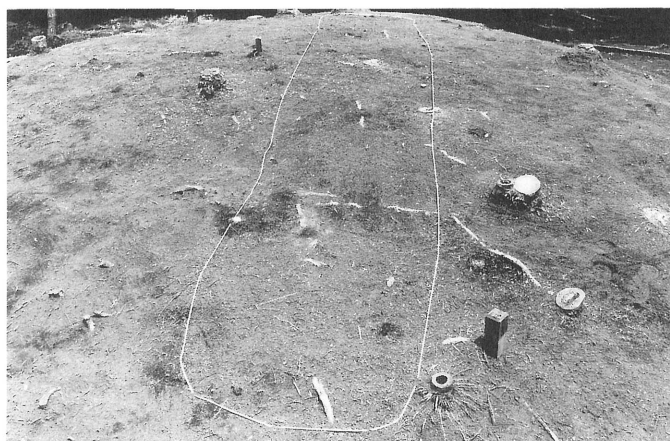
3号遺構周辺土層断面 (No. 1)



2号墳墳丘築造開始面



1号墳墳丘下調査状況



2号墳墳頂部中央主体部推定プラン



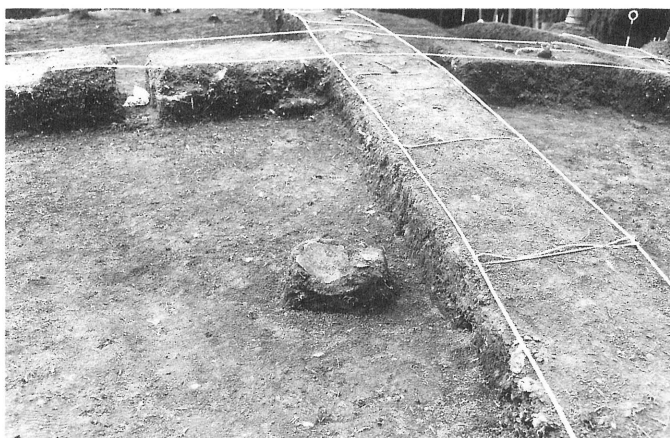
2号墳中央主体部推定プラン内遺物出土状況 1



2号墳中央主体部推定プラン内遺物出土状況 2



2号墳墳頂主体部推定プラン



2号墳墳頂部南側主体部推定プラン内遺物出土状況 1



2号墳墳頂部南側主体部推定プラン内遺物出土状況 2



2号墳墳頂部南側主体部推定プラン内遺物出土状況 3



2号墳墳丘内攪乱(竹根)プラン内鉄器検出状況



2号墳調査風景



3号遺構



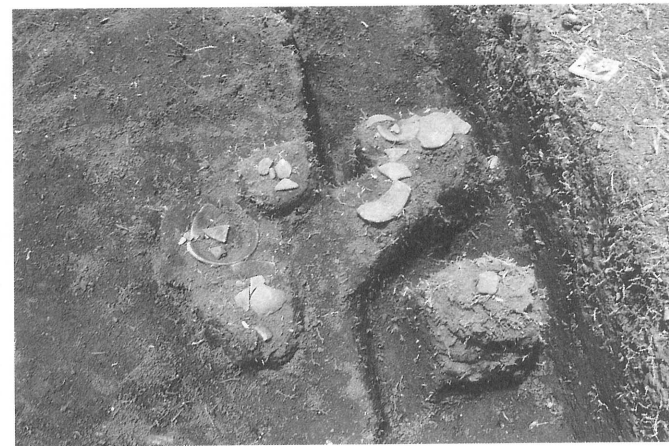
5号遺構遺物出土状況 1



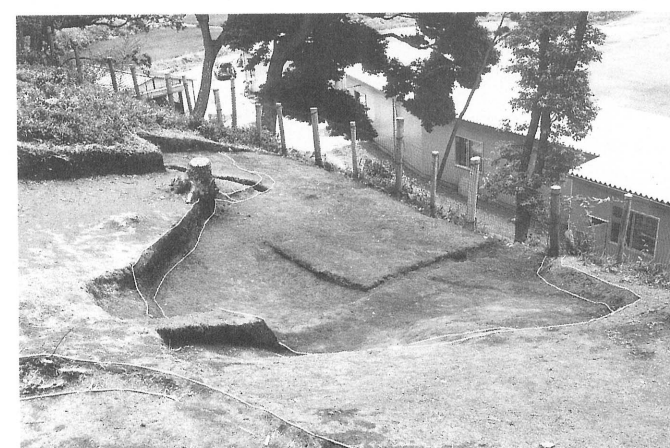
5号遺構遺物出土状況 2



5号遺構遺物出土状況 3



5号遺構遺物出土状況 4



5号遺構完掘状況



6・7号遺構調査風景



6号遺構 1



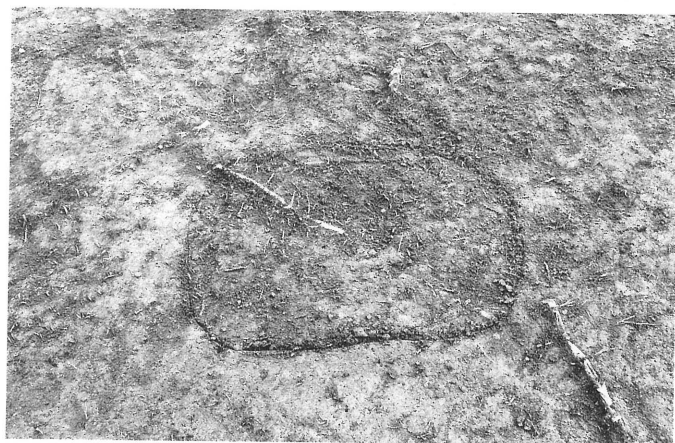
6号遺構 2



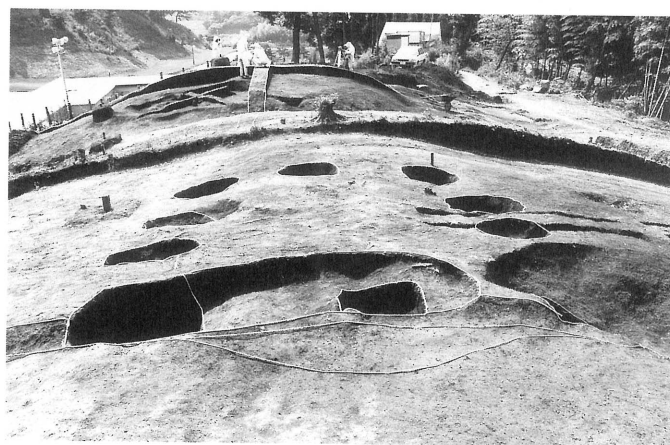
6号遺構 3



6号遺構 4



7号遺構 Pit 検出状況



7号遺構完掘状況



8号遺構焼土検出状況



8号遺構完掘状況



1-1



1-2



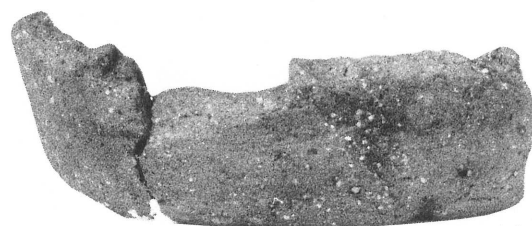
1-3



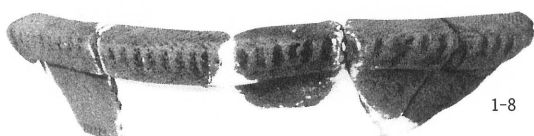
1-4



1-5



1-6



1-8



1-11



1-12



1-13



1-14



1-7



1-9



1-10



1-15



1-16



1-17



1-18



1-19



1-20



1-21



1-22



1-23



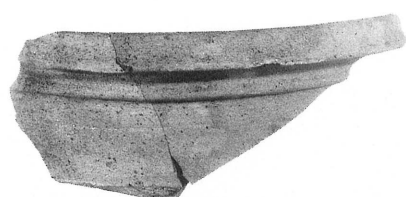
1-24



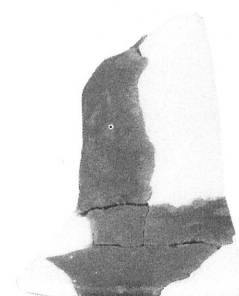
2-1



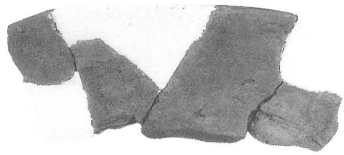
2-3-A



2-2



2-3-B



2-4-A



2-4-B



2-5



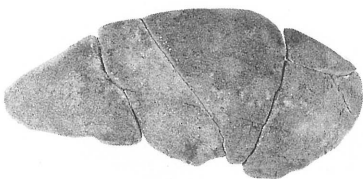
2-6



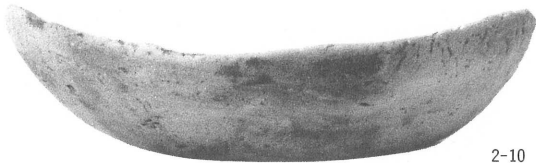
2-8



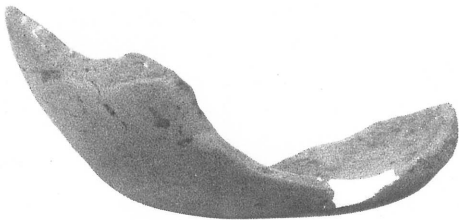
2-7



2-9



2-10



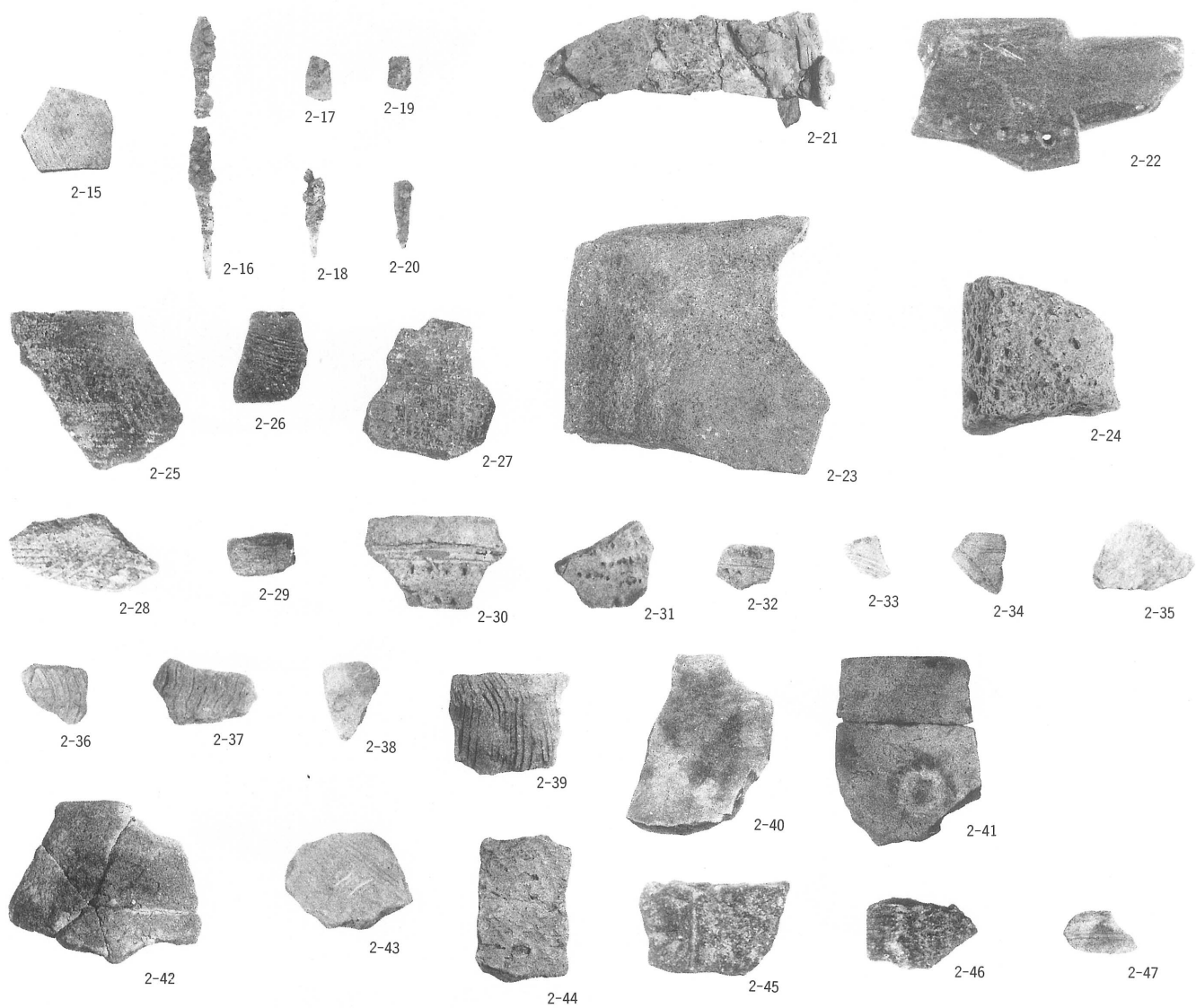
2-11



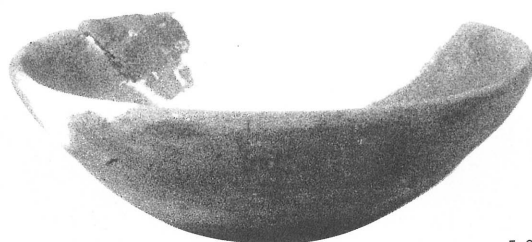
2-12



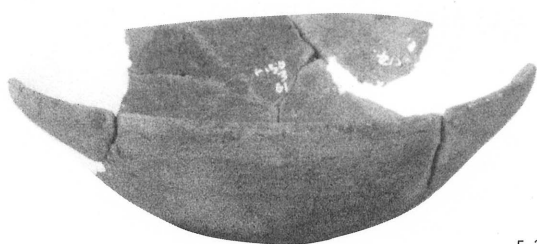
2-13



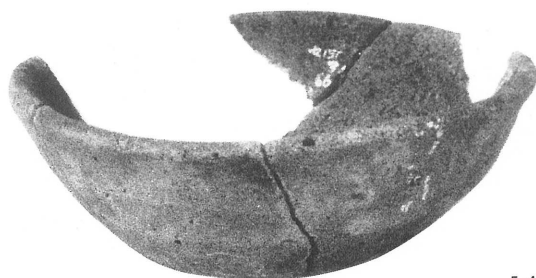
5-1



5-2



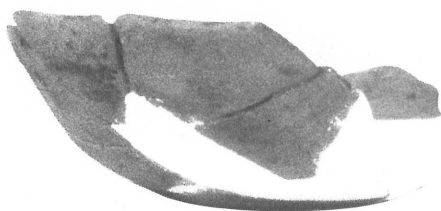
5-3



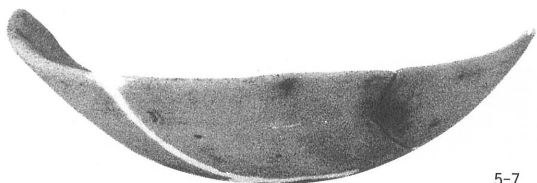
5-4



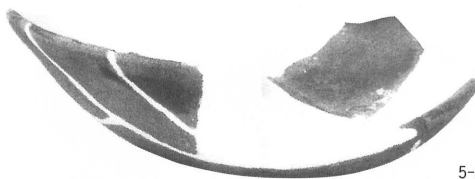
5-5



5-6



5-7



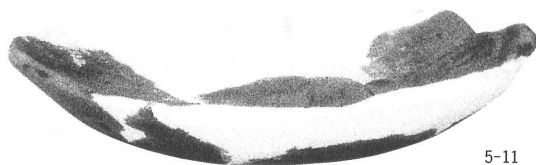
5-8



5-10



5-12



5-11



5-16



5-13



5-17



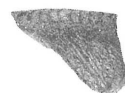
5-18



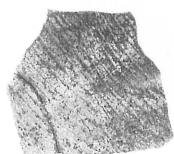
6-1



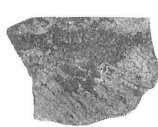
6-2



6-3



6-4



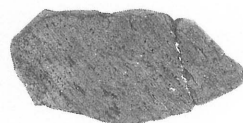
6-5



6-6



6-7



6-8



6-9



6-10



6-11



6-12



6-13



6-14



6-15



6-16



8-1



8-2

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第50集

市原市安須古墳群

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 泉 水 建 材 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

〒290 千葉県市原市能満1489番地

Tel. 0436 (4 1) 9 0 0 0

印 刷 株 式 会 社 弘 文 社

〒272 千葉県市川市市川南2-7-2

Tel. 0473 (2 4) 5 9 7 7